

若者たちへの伝言



長野大学社会福祉学部山浦ゼミ
「信州上田学」2022年度事業

はじめに

2022年2月に始まったロシアによるウクライナへの侵攻は、未だ終わりが見えず、一般市民をも巻き込み、インフラへの容赦ないミサイル攻撃も続いております。

そして、ウクライナの人々は厳しい冬を迎えております。

一方、我が国は、太平洋戦争の終戦から77年を迎え、戦時下の生活体験者の高齢化が進み直接当時のようすを聴き取ることが難しくなっていることが喫緊の課題となっています。

そこで、戦時下の生活体験者(ヒト)や戦争遺跡(モノ)から歴史的事実を掘り起こし、戦時下の日常を次の世代に語り継ぐことが極めて重要であると考えます。私たち戦争を知らない世代の者たちが、戦時下の日常を生活体験者から直接聴き取る「知る」ことによって、戦争体験を身近に引き寄せ、自分事としてとらえていかなければならないのではないかと思います。

同時に上田市内に残る太平洋戦争の戦争遺跡について直接訪ね、フィールドワークすることを通して、感じたことや学んだことを同世代や次の世代に「語り継ぐ」或いは後世に伝えていくことも必要であると思います。そのために戦争遺跡の「保存」活動も課題となってくるように思います。

本調査研究は、このような思いや願いから「二度と戦争を繰り返さない」ために、そして「戦争体験を風化させること」なく、平和の尊さをかみしめていく一起点としていくために行われたものであります。

戦時下の厳しい時代を乗り越え、たくましく生き抜いた「生き証人」の皆様からの生の声を「次の世代への伝言」として受けとめ、お読みいただければ幸いです。

長野大学社会福祉学部 山浦 和彦

目次

はじめに	01
目次	02
第1部 若者たちへの伝言	03
「英語は敵国のことば」だから（渡辺三樹子さん）	04
もうひと掬いのやさしさ（小山みき子さん）	06
戦時下の浦野のくらし（小山和弘さん）	08
今の平和な世の中は夢の夢（小泉昭美さん）	10
戦争は人と人との殺し合い（水出照子さん）	14
男は、国のために死ぬのは当たり前、人生僅か20年（井沢二三さん）	16
防空壕のなかで父からかけられた「頼んだぞ」の一言（春原寿雄さん）	20
鍋の中に入れる物は何もありませんでした（(仮名) 小林さえさん/林とみ子さん）	22
異郷の地から故郷の父母に感謝し安泰を祈りました（松野幾代さん）	26
一夜にして敗戦国へ（前島章治さん）	30
空襲警報の最中のピアノ演奏「ショパン華麗なる円舞曲」（宮島満里子さん/杉山洋子さん）	32
国に従わない者は、非国民（黒坂明さん）	36
戦時下の小学校生活（高野賢一さん）	40
武石のすり鉢（宮原文男さん）	44
戦死した戦友の小指をご遺族のもとへ（荒川キヨさん）	48
忘れられない特攻隊出撃の最後のあいさつ（柳沢四郎治さん）	51
切り倒されたポプラの木（堀内富美子さん）	54
お国のために出征し、尊い命を捧げた人々（田中兵次さん）	56
振り向けば七十六年ー靖国の母と生還者の妻ー（山本洋子さん/山本一清さん）	59
第2部 上田市内に残る戦争遺跡	69
本原小学校に保存された奉安殿	70
旧上田飛行場	72
長野県で初めて空襲を受けた上田市～上田空襲は3回あった～	74
完成されなかった飛行機部品半地下工場	77
松の木が語る戦争	80
遊佐卯之助准尉の自決から考えさせられたこと	83
第3部 調査研究を振り返って	87
若い世代のこれからの役割（4年 渡辺康彦）	88
私たちと平和な世の中（3年 岡田輝）	89
今年一年間の活動を振り返って（3年 工藤千佳）	90
理想を現実に（3年 篠原隆雅）	91
一年間の活動を振りかえって（3年 下島佳乃）	92
今年一年間の活動を振り返って（3年 高田一吹）	93
一年間の活動を通して（3年 宮城佑妃子）	94
編集後記	96

第1部

若者たちへの伝言

「英語は敵国のことば」だから



基本データ

- 渡辺三樹子さん（94歳）
住所／上田市浦野在住
- 聴き取り日／2022年6月3日
- 終戦当時の仕事等／青木小学校の先生
- キーワード／自由

Q 終戦当時はどこで何をされていまし

青木村で小学校の先生をしていましたそうです。

上田染谷丘高校専攻科を卒業した。当時は教師が足りなかったから高校卒業してすぐに教員免許なしで教師になる人が多かった。渡辺さんもその1人。同校を卒業した友人の多くは名古屋の工場へ行った。授業の他にもなぎなたやバケツリレーで防火訓練なども行っていた。

【小学校の先生をされていたときのエピソード】

○校庭の中央にある台の上で、渡辺さん自身が子ども達に「右向け右！気をつけ！」など軍隊のような号令をかける訓練も行っていた。

○今でも忘れられないのが、終戦当日（8月15日）に進駐してきた大勢のアメリカ兵が校庭から学校を見ていたこと。どうして見ていたのかは分からない。

Q 当時はどのような生活を送っていましたか？（衣食住）

【衣】もんぺ

【食】家畜も飼っていたし畑もあったから食べるものにはあまり苦労はしなかった。それでも道に生えている野草は全部抜かれていた。一番美味しかった野草は「あかざのくるみ和え」。

【住】くずや藁^{わら}で屋根はできていた。寒い冬には囲炉裏^{いろり}や炭のおこたで身体を温めた。

Q 当時、悲しかったことや辛^{つら}かったことは何ですか？

○英語が学べなかったこと

学生時代の英語教師に憧れ、自身も英語が好きになり学びたいと思うようになった。しかし、英語は敵国語のため当時の日本では話すことは禁止されていた。学びたかったのに学べなかった。このことが一番悲しかった。

○制服を着たりスカートを履くことができなくなってしまったこと

当時の染谷丘高校の制服はとても可愛くて気に入っていた。しかし、非常時にすぐに身動きがとれるよう、制服ではなくもんぺを履かなくてはいけなくなった。私生活でもスカートではなくもんぺを履かなくてはいけなくなった。他にも洋服はお兄さんのお古の

シャツを着たりと、そのうち、「お洒落しゃれをする」という意識はなくなっていった。

Q 当時の楽しみは何でしたか？

- 英語を学ぶこと。しかし、敵国語だから思うように学べなかった。
- 冬に常田池に友だちとスケートをしに行ったこと。靴スケートに憧れていたが値段が高く手に入れることができなかった。その代わりに「下駄げたスケート」を履いて滑った。下駄スケートはバランス感覚をとるのが難しかった。

Q 当時、戦争に対してどのような印象を抱いていましたか？

そもそもしっかりとした情報があまりなかったため、戦争がどのようなものなのかを全く知らなかった。後から日本が他の国に対して行ってきたことがどれほど酷ひどいものであったのかや、戦争がこんなに悲惨なものであったことを知り、戦争は間違っていたと思うようになった。

Q 終戦の知らせはどこでどのように知ったのか。知ったときどう感じましたか？

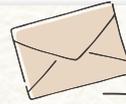
自宅のラジオ（玉音放送ぎょくおん）で知った。戦争が終わったことを知り、ただただ嬉しかった。

Q 渡辺さんにとっての「平和」とは何ですか？

今。何でもあって自由に好きなこと、やりたいことが思いっきりできること。

Q 今の私たちに伝えたいことは何ですか？

羨ましい。自分の好きなことを自由にいっぱい学んだり、やりたいことにはどんどん挑戦して行ってほしい。



私からの返信



渡辺さんのお話をお聞きする中で、何度も私に「幸せね。」「羨ましい。」と口にしていたのが強く印象に残った。戦争当時、学びたくても思うように学べなかったり、服装も規制されたりと、とにかく自由が効かなかった時代を過ごしてきた渡辺さん。渡辺さんの話を聞きながら私は自分自身の日々の暮らし方や考え方を振り返ってみた。

今、私が自分のやりたいことや好きなことを自由にのびのびとできることは決して当たり前なことなんかではないにも関わらず、さも当たり前のように感じていたことは贅沢ぜいたくなことだったと思う。また、やってみたいことがあっても抵抗を感じて結局挑戦できずにいたことがいくつもあることに気がついた。自由に好きなことや、やりたいことができる環境があるからには、思う存分行動に移していきたいと思う。それから私は、今まで歴史の教科書やテレビ番組等で戦争について学び、まだまだ知らないことばかりであるはずなのにどこか知った気でいた。今、私が暮らしている上田市も一見綺麗な山々に囲まれのどかな場所だが、昔はここも空襲の被害に遭あったこと、そして当時この地で実際に暮らし戦争を体験された方々の生の声を聞き、自分が今暮らしている地域に対する見方が変わった。まだまだ私が知らない上田市が歩んできた歴史や、当時の人々がどのような暮らしをしていたのか、どのような思いでいたのか、その一つ一つに触れ、より地域のことを知りたいと強く思う。

自由に自分の夢を追いかけたり、自分の「好き」「やりたい」を思いっきりできることは当たり前なことなんかではなく、実はとても幸せなこと。

（文責 3年 工藤千佳）

もうひと掬いのやさしさ



基本データ

- 小山みき子さん (97 歳)
住所 / 上田市浦野在住 (上田市傍陽出身)
- 聴き取り日 / 2022 年 6 月 3 日
- 終戦当時の仕事等 / 農業、上小青年団に所属
- キーワード / 戦時下の貧富の差
情報統制

Q 戦時下の衣食住についてお話しください。

小山さんの家は真田町傍陽にあり、古くから建っていた家だった。畑や山を持っていて戦争時でも自給自足で生活していった。上田の市街地から米や豆を求めて小山さんの家に訪ねてきた。持参した物と米や豆と交換した。小山さんは、買い出しに来た人たちがかわいそうだと思います、いつもひと掬いおまけしてあげていた。米や豆をおまけしてもらえると、この噂を聞きつけた市街地の人たちが小山さんの家に集まってきたという。しかし傍陽にも飛行機が通ることがあり、その時は桑畑に身を隠して気づかれないようにしゃがんでいた。

・二人の兄弟が戦死し、父は庭で泣いていた

小山さんは兄3人、小山さん、弟1人の5人兄弟であった。長男は士官学校でも優秀で将校となり、兵隊時に着る軍装は合わせて今のお金で1000万円ぐらいかかったという。そのお金は小山さんの家が所有する山の薪を売ってお金に換えた。長男は中国・中州へ、次男は満州へ行った。長男は敵に打たれてお腹を貫通し出血多量で、次男はテニヤン島で玉砕となり同日に亡くなったことを知らされ

た。特に長男は亡くなった時の様子を細かく知らされたが、同日に戦死したという知らせからも真偽は不明であった。戦死の知らせを聞いたとき、父は庭で泣いていたという。遺骨はなく、長男が残っていた髪の毛と爪の破片が残っている。次男は玉砕であったため残っている物は何もない。三男は盲腸にかかり、手術をしたために20才の兵隊検査の時に静養してから兵隊に行くようにといわれ、終戦となったため行かなくて済んだ。

Q 当時戦争に対してどのようなイメージ持っていたらっしゃいましたか？

政府からの情報は「〇〇を征服した」など日本がまるで優勢かのように国民に知らせていたが実際はそんなことはなかった。当時は政府から嘘の知らせを受けていたこともあり、「日本が負けるわけがない」と思っていた。「負ける」なんて言えなかった、周りの目もあるから。

・天皇陛下が絶対だった

天皇が敬われていた。戦争を行った政権である陸軍・東条英機が憎い。海軍・山本五十六さんはただ一人だけ「日本は戦争で負

ける」と戦争に反対していたが陸軍からは聞き入れられなかった。誰も「天皇バンザイ」といって死ぬ人はいなかったという。

Q 終戦の知らせはどこで知りましたか？

どの家にもラジオやテレビがあったのではなく、近所のある家に集まって天皇からの終戦の知らせを聞いた。電波が悪かったのかはっきりと聞こえなかったが終戦、日本の敗北を知らされた。あと1, 2年早ければ兄たちは死ななかったのに、なぜあんなに良い兄たちが死ななければならなかったのかと思ったそうだ。戦争から帰ってきた兵士たちは農家を手伝っていた。お米をたくさん食べていたそうだ。

・上小青年団

それぞれの町や村から男女2人ずつ選ばれた。戦争中は竹を使って敵の兵と戦うことになった時の訓練をしていた。戦後は人を助ける代わりに賃金をもらう活動をしていたという。

Q 私たちに伝えたいことをお話しください。

絶対に戦争をしてはいけない。男女を問わず良いことは一つもない。兄2人を死なせた戦争がひどく憎い。なぜ、未来を生きていくはずであった兄たちが死ななければならなかったのかわからない。ウクライナで戦争を行っているロシアのプーチンも憎い。戦争中に幸せだと思ったこと、戦争をして良かったなど一度も思わなかった。



私からの返信

事前に上田市の戦争の記録を読んで、戦争は国民のためであるから我慢しなければならないというイメージがあった。しかし小山さんは衣食住においてはあまり不便な思いはしていなくて反対に食に困る人たちを支援する側であった。戦時下であっても貧富の差はあったのだと感じた。人と人が争い、大勢の人が死んでしまい、勝敗をつけるなどあってはならないことである。自分の大切な兄弟、両親が戦争でいなくなってしまうなど考えただけで悲しい、悔しい思いになる。戦争以外で解決方法、打開策はあるはずだ。当時の戦時下の様子を聞き、今のロシアとウクライナ戦争と重なった。日本が戦争を行っていた当時は日本が優勢であるかのように知らされ、嘘の情報を流され、戦争に反対すること、戦争に日本が負けると言える状況ではなかったとお聞きして、ロシアでも情報が制限されていて同じような状況が起きているのではないかと考えた。

小山さんから「戦争を絶対にしてはいけない」という強い気持ちを感じた。その思いを受け取った自分たちが二度と戦争を起こさないためにも次の世代へと継承していかなくてはならないと感じた。

(文責 3年 下島佳乃)

戦時下の浦野の暮らし ～配給の時代～



基本データ

- 小山和弘さん（85 歳）
住所／上田市浦野在住
- 聞き取り日／2022年6月3日
- 終戦当時の仕事等／小学校3年生
- キーワード／「配給の時代」

Q 終戦当時はどこでなにをされていたか？

小学校3年生で家にいた気がするが、終戦の瞬間の記憶は特にありません。周りの大人たちの反応でだんだん理解することができました。

Q 戦時中の浦野はどのような状態だったでしょうか？

家が商売をやっていた関係でそこまで生活に困るということにはなかった。二階建てで商売と同時に二階では養蚕も行っていました。

終戦前後はお盆の時期ということから、多くの村の人が「切符」を持って店にやってきました。

嗜好品しこうひんである、たばこがよく出た記憶があります。

Q 印象に残っている出来事がありますか？

- ・ガソリンポンプ置き場が浦野に設置された。
- ・松狩り（松の枝を集める）を行っていました。その松狩りの目的を当時は分かっていませんでした。

- ・工場の建設から戦争というものを実感しました。
- ・昭和19年に鉄塔などの鉄製品を木に変えていきました。
- ・朝鮮人が家族連れで村へ来ていました。自分の学校の同じクラスにも朝鮮人が来ました。終戦後朝鮮人が自国に帰るとなったとき「バンザイ、バンザイ」と何度も声を挙げていました。
- ・男は戦争に行ってしまう人手が足りませんでした。消防団についても数少ない男性と補助として何人かの女性も参加していた。
- ・男は戦争、女は補助という考えが当たり前だった。
- ・食糧難で富山県から父の弟が奥さんと子供3人で浦野に来た。それと同時期に20人以上の子どももやってきた。多くの子どもは泣いていた。
- ・校庭は遊ぶためのものではなく畑のために開墾かいこんされた。
- ・当時は戦争ごっこをよくしていた。
- ・電車からバスへ移行していきました。

Q 若い世代に伝えておきたいことをお話しください。

戦争はやってほしくない。いけないことだという認識をみんなに持ってほしいと思います。



私からの返信

小山さん自身、戦争当時の記憶はほとんどないとおっしゃっていた。しかし、聞き取りの中では多くの戦争当時に関する記憶がありました。

浦野の当時の記録を残そうと執筆活動をしている小山さん。

戦争を体験した世代の人々はその記憶、事実を風化させないように多くの活動を行っているのだと感じました。

戦争は私たちがこれまで学んできたものよりももっと生々しいものであり、戦争を知ることこそ、戦争を二度と起こさないことに繋がるのだらうと考えました。

今回の聞き取り調査を通じて、改めて戦争は絶対にやってはいけないことであるということ。戦争の記憶、事実を私たち若い世代が知ることの重要性を知ることができました。そして私たちだけで終わらせることをせず、同年代、そしてさらに若い世代に伝えていきたいと考えます。

終戦から約80年たった今だからこそ、国際情勢が不安定な今だからこそ、この活動に意味があると改めて考える機会になりました。

(文責 3年 岡田 輝)

今の平和な世の中は夢の夢



基本データ

- 小泉昭美さん（94 歳）
- 聞き取り日 / 2022 年 6 月 3 日
- 終戦当時の仕事等 / 学生 農家
- キーワード / 食糧不足、疎開

Q 戦時中はどのような学校生活をお過ごしでしたか？

昭和3年生まれ。17歳のとき終戦を迎えました。昭和7年には満州事変、12年には志那事変、16年に太平洋戦争開始となっており、生まれてから青春時代を戦争と共に過ごしたと語ってくれました。小学校では、高学年に上がったところから体育と勤労奉仕の時間が増え、勉強をする時間はほとんど無かったと言います。特に銃剣術と体操の時間ばかりが増えたそうです。しかし昭美さんは、このような授業に切り替わるよりも前に修学旅行にいったそうです。行き先は東京。修学旅行に行ったのは昭美さんの学年が最後でした。肉体労働が多く、宿題などは親が寝てからやっていたそうです。学生時代を思い返してみても勤労奉仕ばかりで授業や勉強の記憶はほとんどないと言います。

Q 戦時中、強く印象に残っていることをお話しください。

食糧が不足していたことが強く印象に残っているそうです。お店にいても品物は並んでおらず、どこにも物資はありませんでした。

その中で配給されるのはわずかばかりのサツマイモのみで、皆飢えに苦しんでいたそうです。お百姓であった小泉さんは漬物や野菜(白菜の外の葉など)を疎開してきた人々に分けていました。白菜の外の葉は堅いため普段は食べずに処分しますが、戦時中は「頂けませんか」と求める人々がいました。

こんなこともあったそうです。

当時は干した柿が串にささった「串柿」というものが店先に売っていました。昭美さんが見た戦時中の子供達は、誰かが柿を食べた後の串をしゃぶっていたと言います。彼らは串についたわずかな柿をなめて、甘さを感じていました。戦時中は甘いものが貴重だったため、こうもしないと甘いものを口にすることができませんでした。

また、道ばたになった野の草や豆などを食べていた人たちもいたようです。疎開してきた人たちは特に大変そうだったようです。疎開児童のお弁当はごろりとした芋が入っているだけのもので、とても質素だったと思います。私は、そのお弁当を見て可哀想に思い、決して量は多くなかった自分のお弁当のおかずを分けてあげました。すると、疎開児童は

とても喜んでくれました。自分にとっても貴重なおかずでしたが、喜んでる様子を見て「あげて良かった。」としみじみ思いました。

Q 戦時中の食べ物と供出^{きょうしゅつ}について教えてください。

小泉さんの家では、石臼で挽いた粉もちなどを食べていました。他にも畑でとれた米や野菜、配給された芋などを食べていたようです。また自家製の味噌なども口にしていたようです。配給は芋などが配給されていました。農家であった小泉さんの家では、あらゆるものを供出^{きょうしゅつ}するように求められたようです。特にお米や麦、大豆など主食になるものの話が目立ちました。このような状況だったため、家で食べられる量はわずかでした。そのため天気や病気に左右されない質のいいものをつくらなければ家で採れたものを食べることはできなかったそうです。運動靴や長靴は配給されましたが、靴底が薄く、すぐにボロボロになってしまいました。学校と家の距離が遠い人から靴の配給が優先されていたので、ボロボロになったからといってすぐに新しい靴を手に入れられるわけではありませんでした。兄弟の靴がボロボロになる度、小泉さんは裁縫^{さいほう}をして直したという。

Q 両親は戦争に対してどう思っていましたか？

嫌だ、と言っていたようです。とてもせつながっていたことを覚えているそうです。

Q 当時、娯楽（楽しみ）はありましたか？

小泉さん自身は、温泉やお風呂に入ることがささやかな楽しみだったようです。

Q 玉音放送を聞いてどう思いましたか？

小泉さんのお家にはラジオがあったため、家で聞いたそうです。「こんなに一生懸命やってきたのに、負けてしまったのか」というやりきれなさが込み上げてきたそうです。

Q 特に悲しかった・つらかったことは何ですか？

「はっきりとしたエピソードは思いつかないが、とにかく戦時中はつらく、せつなかった事だけを覚えている」といいます。

Q 私たちに伝えたいことをお話しください。

「戦争は絶対にしてはいけない。今の平和な世の中は夢の夢」と締めくくられました。



私たちからの返信

今回の聞き取りを通して、戦争の形をはっきりと捉える事ができたように感じます。「戦争」については、今までも学ぶ経験はありましたが、どれも大きなトピックや事象についてが多かったと思います。戦争の悲惨さや残忍さは感じる事ができるけれど、一人ひとりがどんなことを考えて何をしていたのか知ることができませんでした。事実を中心に戦争を知ることも大切ですが、それらはどこか無機的で他人事のようにしか感じ取れない気がしていました。

しかし今回の聞き取りは、戦時中を生きた当事者からのお話でした。国の代表者と違い戦況を大観することができず、見ることも知る事も制限された日常の中で必死に生きていた人たちの話。それらは強い感情とセットで語られる血の通ったものでした。教科書や歴史書には記述されない些細な出来事や、よく耳を傾けなければ聞き取れないエピソードが多くあった様に思います。

今回の経験を通して、目立つところに記述されないささいな事柄こそ「戦争」というものをより近く感じさせることができると感じました。今回の聞き取りを通してより身近になった「戦争」の知識や認識を使いながら向き合ってきたと感じました。

(文責 3年 高田一吹)

つらかったことに「ものがないこと」をあげていた小泉さんは、お話の中でも困窮こんきゅうやものがない切なさを強く語ってくれました。私たちが生きる現代には大量生産・大量消費という言葉があるように、多くのものに囲まれています。ものがあることが当たり前になりすぎて、そのありがたみを忘れてしまうどころか、時にはありすぎて邪魔だと思ふことすらあります。しかし、戦時中のものがない辛さを知ったことで、食べ物や必要なものがすぐに手に入れられる環境の尊さがわかり、この環境に感謝しなければならぬと感じました。

私は沖縄県出身で、地上戦を体験した県民の方々からお話を伺う機会に多く恵まれました。当時の沖縄を知る人々は地上戦を通して人の命がどんどん消えていく戦争の惨さを私たち若い世代に伝えてくれました。長野県では沖縄のような戦闘による被害は少なかったものの、小泉さんのように戦争による貧しさで苦しい思いをした人々が大勢いた。たとえ戦闘に巻き込まれなくても戦争ですべての国民が辛い思いをしていたことがうかがえました。

(文責 3年 宮城佑妃子)

戦争は人と人との殺し合い



基本データ

- 水出照子さん（93 歳）
住所／上田市浦野在住
- 聴き取り日／2022 年 6 月 3 日
- 終戦当時の仕事等／学生
- キーワード／戦争は人と人との殺し合い
学童疎開

Q 戦時中の生活で印象に残っていることをお話しください。

○学童疎開について

東京の品川から疎開してきた学生たちを観ていました。生活用品（シャンプーなど）はどんどんなくなっていって、お肉は食べられない。食べるものが少ないのが可哀想だった。

○当時の丸子町の様子について

空襲警報のサイレンの時：防空壕がないため、防空頭巾をかぶって家の中にいた（近所から一つの家に固まっていた）。朝鮮人の人たちが丸子町にいて道路を作っていました。

○学校や食べ物について

水出さんの家は、農家であったため、食べ物には困っていなかったようです。

○当時の学校の様子について

校長先生が朝に日本軍の戦果の報告をしていました。外国については、アメリカがどのくらいの大きさなのか分からなかったため、日本が勝つと思っていました。

遠くのことだと思っていました。

Q 終戦をどのように迎えられましたか？

自分の家にラジオがあり、周囲の家の人が集まりました。泣いていた人がいたことを覚えています。

Q 終戦後のくらしの様子をお話しください。

2 年くらい生活用品の切符制きつぷが続きました。

Q 今の私たちに伝えたいことをお話しください。

戦争は人と人との殺し合い。絶対に駄目です。



私からの返信

今回お話を聞いて感じたのは、思っていた戦争とはだいぶ様相が違うということです。思っていたよりも平和だったと言わざるを得ません。

当時の上田市は丸子町を統合しておらず、上田市、特に上田市街地にある軍事施設への空襲はあったものの丸子町には空襲がありませんでした。また、丸子町は市街地から離れ、農村部だったので爆撃の対象になりにくかった。そういったことが、戦時下でも平穏だった所以だと思えます。また、日本は天然の防護壁があるため、本土が主戦場となりにくく、太平洋戦争の序盤ではインドネシア周辺や、ハワイ諸島周辺等の日本から遠く離れたところでの海戦がメインであったことや、大本営が発信する情報に制限があったため、遠くのことだと認識してしまったのだと思いました。

こうした私の思いは、戦争を軽んじているものだと思われ、受け止められる可能性があります、それは違います。むしろ当時田舎であった丸子町までも、戦争の影響が及んでいたことに驚きを隠せなかったのです。大都市はもちろんのこと、地方都市でさえも爆撃され、その余波というものが国内全体に及んだのは恐怖であり、戦争というものはそれほどまでに人間にとって脅威である行為だと実感しました。

水出さんの体験をお聴きして、戦争を繰り返してはならないことなのは自明の理であると感じました。戦争体験者の体験をお聴きして、それについて思ったことを私たちの世代が発信するということが一つの解であると思いました。しかし、それは一つの解に過ぎないと私は思います。これを一つの資料として考察していくとともに、さらに多角的な視点から戦争を精査していくことが必要だと考えます。

(文責 3年 篠原隆雅)

男は、国のために死ぬのは当たり前、 人生僅か20年



基本データ

- 井沢二三さん（93歳）
住所／上田市越戸在住
- 聴き取り日／2022年6月24日
- キーワード／青春時代と戦争

Q 太平洋戦争当時の井沢さんの体験をお話 してください。

私は、当時「予科練」と呼ばれる海軍飛行練習生でした。毎週日曜日にグライダーの訓練を上田飛行場で受けていました。

昭和18年（1943年）海軍の飛行兵を志願しました。当時は、上田城跡に公会堂があり、兵隊検査（一次試験）を行いました。

徴兵検査を受けるとどこに配属されるか分からなかったため、それは受けませんでした。

二次試験は三重県に行き、クレペリン[※]等の色々な検査を受けました。検査2日目に大きな地震が来ました。二次試験の結果は、不合格でした。

※クレペリン検査とは、一桁の足し算を行い、その結果を元に受検者の性格や適性を診断。受検者の「能力面の特徴」や、「性格や行動面の特徴」を測るため実施された心理検査。

昭和18年12月9日夜 小泉蚕業（現上田東高校）に爆撃がありました。

昭和20年（1945年）8月

当時制空権が無かった日本は、アメリカの航空母艦から飛び立ったグラマン戦闘機（機関銃を積んでいる）によって上田が空襲され

ました。

その後、終戦の詔勅がありました。しかし、ラジオがノイズで聞こえづらく、「がんばれ」なのか「負けた」の内容なのか分かりませんでした。

終戦直後は、陸軍が少し反発をしたらしい、終戦の玉音を渡さない計画をしたとかなんとか聞きました。

Q 戦時中の暮らしについてお話しください。 《闇米》

戦後もしばらくは米等の農作物は貴重で、農家が余分に作った分は農家自身が東京などの都市に高値で売って「闇米」と呼ばれていました。

軽井沢の駅では、闇米の検査がありました。闇米を持っている人は、無回答で黙っていました。

持ち主がわからないようなお米は列車の外へ投げられ捨てられたのです。

Q 一番印象に残っているのはどんなことですか？

軍事教育と大本營の発表、軍歌です。

終戦から70年経った今でも、当時歌われていた軍歌を聴くと自身の青春時代と重なっていた当時を思い出して、胸が熱くなるのを感じます。

戦争の残虐さ^{いきどお}に憤る一方で、当時を思い返すと特別な感情に駆られます。特に軍歌を聴くと興奮や憧れが青春の思い出として蘇^{よみがえ}るんです。

当時は、国のために死ぬことに何の疑問を抱きませんでした。

「男は国のために命をささげるのは当たり前」

「人生僅^{わず}か20年」と言われていました。

男性が兵士になることは当たり前で、20歳が寿命だと教えられていた。

海軍は、金ボタンの制服で私たちの憧れでした。

天皇は神様でしたし、本土上陸は九十九里浜に来ると最初は思っていました。

Q ご家庭に関してはいかがでしたか？

家は百姓をやっていました。

お米が多く取れました。

15歳の息子（私）が飛行兵に志願しましたから、親はどう思っていたのかわかりません。

予備学生（大学生）が九州から沖縄へ特攻に飛び立つ時代でした。

兄は海軍で南シナ海へ、フィリピン沖海戦を戦ったが、戦艦から海へ投げ出されました。しかし、復員船^{ふくいん}に運よく拾い上げられ、復員証をもらいました。

Q 私たち若者に語り継ぎたいことをお話してください。

戦争には、勝ったも負けたもなく、戦争でいい目にあう人間はいません。戦争は、やっ

てはいけません。

戦力は持たずに外交一本で行くべきです。

憲法9条をしっかりと読んでほしい。



私たちからの返信

今回は、戦争当時軍に憧れていた方のお話しをお聞きしました。メモには書いていませんでしたが、海軍の飛行兵検査では、クレペリンの検査のこと以外にも、身体能力のバランス感覚を図る検査等があり、検査を突破するにも難しいものであったと思います。また、闇米のお話は非常に興味深いお話でした。現代ではあり得ないこともこの時代にはあり得たことであるのと同時に、当時先進国であり、大国として数えられた大日本帝国であっても、そのような事態となっていたということを聞いて、戦争の怖さが別角度から見ることができた気がします。

次世代に発信したいこととして、戦争は良くないこと、外交重視を言われていた。私はその通りと思いつつも、現代では難しい問題であることも同時に理解しなければならないことだと思いました。戦力は持たずに外交だけで解決できる問題はどれくらいあるというのだろうか。それが理想であるのは間違いないだろう。しかし、なぜ世界中の国が軍隊を放棄しないのだろうか。考えなければならない現実的な問題と理想論をどれだけマッチさせることができるのか。今の世界情勢はそのフェーズに来ていると考えます。

(文責 3年 篠原隆雅)

当時の軍国教育は徹底的だった。井沢さんは当時15歳という若さだったが、国のために死ぬことに疑問を抱かなかった。飛行兵に志願するのも嫌だとは思わなかったし、憧れもあったように思います。戦争が終わった今、飛行兵に志願したいと言ったときに親はどんな気持ちだったのか考えさせられました。

戦後から70年以上が経った今でも、当時歌われていた軍歌を聞くと自身の青春時代と重なっていた当時を思い出して胸が熱くなるのを感じるということも当時の軍国教育がいきわたっていたということなのでしょう。

(文責 3年 宮城佑妃子)

戦争への忌避感や怒りを述べる一方で、当時に対して懐かしみを感じている姿が印象的でした。国の為に命を捧げた戦時中は、井沢さんにとって多感な青春時代でもありました。当時を思い返すと予科練に対する憧れに思い至るし、「若いころ何度も歌った軍歌を聴けば今でも血が騒ぐ。」井沢さんにとって戦争中の記憶が、一言で語れない感情とセットであることが窺えました。

私は今回のお話を伺って、戦争とは体験した人たちによって印象が異なることを肌で感じました。井沢さんもおっしゃった通り、戦争は二度と繰り返してはいけない悲惨なものです。しかし、一人ひとりに深くお話を伺っていくと戦争に対してわかりやすい単語でパッケージできない様々な感情を抱いていることがわかります。だからこそ、そこにある悲惨さや残忍さが如実に私たちに伝わってくるように思います。体験された方々から生の声を聴き、一人ひとりの戦争に対して考えていくことには価値があることだと改めて感じました。

(文責 3年 高田一吹)

防空壕のなかで父からかけられた「頼んだぞ」の一言



基本データ

- 春原寿雄さん（87 歳）
住所／上田市中野在住
- 聴き取り日／2022 年 6 月 14 日
- 終戦当時の仕事等／終戦当時 10 歳、
5 人兄弟の長男
- キーワード／父からの伝言

Q 太平洋戦争当時の生活の様子について話してください。

小学校 1 年生の時に太平洋戦争が始まりました。私は、大きくなったら軍隊に入るものだと思っていました。そしてよくわからないうちに戦争が終わったように思います。

上田で B29 の攻撃があり、防空壕に避難しました。当時は小学校 5 年生で母親と兄弟と一緒に避難しました。防空壕にいと音もほとんど聞こえませんでした。しかし、体が震えていました。家族には知られないようにじっと隠れて我慢していました。父は警防団として活動していたため、消火等に行く間に長男である私に「頼んだぞ」と声をかけました。今でも思い出すと涙ぐんできます。B29 の攻撃により蚕業学校（現上田東高校）が攻撃され、他にも稲が燃えたという情報を聞きました。当時は、たき火に焼夷弾を入れて実験し、やけどを負った子どももいました。

《闇米》

当時は気づかれないようにリンゴの中に米を入れて東京まで運んでいました。東京でそれがわかっている人は買うため、蓼科のリンゴはそれで有名になったんです。

《不発弾》

上田空襲の時、不発の焼夷弾が発見されたんです。警防団の一人が不発弾を持ち帰り、近所の子供に見せました。焼夷弾を遊びで火の中に入れた結果、大爆発しました。同級生の弟は大やけどを負いました。

《食事》

当時はさつまいもの茎を刻んで雑穀米と一緒によく食べていました。喜んで食べていました。贅沢や勝ち負けは言わないのが掟でした。

「贅沢は敵」「勝つまではいりません」が合言葉でした。

《学校》

教科書は黒で塗りつぶされました。終戦後は子どもを増やせと言われていた時代で子どもの人数が多く、1 クラス 60 人規模であり、学校や先生が足りなくなっていました。私は、小学 5 年生まで東小学校にいて、後に南小学校へ転校し（現在の二中の場所）後に第一中学校へと進学しました。教頭先生が担任することもあり、先生も定まらず学校の体制が整っていなかったことがうかがえます。しかし給食はあり、コッペパンや牛乳などでした。いじめはあったようななかったようなで問題視されていませんでした。終戦直後の小学 5～6 年当時公会堂（現在の上田

市民会館跡の2階)で寺子屋のようなものが開かれました。遊ぶ場所は上田公園で石垣に上って遊んでいました。また、授業を受けていた公会堂の一階では紙芝居や芝居をよくやっており、覗き込んでいました。大きくなったら大人は兵隊に行くという考えであり、軍事教育は受け入れられていました。

《読書》

活字を読みたいと小学校当時思っていました。が、上田市立図書館は貸出券が必要でした。(当時貸出券を持っていたのは1クラス60人中1人～2人くらい)口論文や宮本武蔵などが置いてあり全巻読みました。周りと学力の差はありませんが、本を読むことで知識の幅が広がると思っていました。今思うと、よくみんな活字を覚えられたものだと思います。

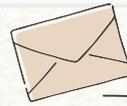
《日常生活》

小さなころから親父の目の合図で自分の行動の良し悪しを決めていました。親の顔色をうかがう子でした。家庭内での上下関係が今より明確でした。贅沢やわがままは怒られました。親は戦争について話したがらなかったように思います。

教科書内での知識だけでなく、雑誌も読みたかったけれど、贅沢はできない生活でしたから。

Q 次の世代へ語り継ぎたいことをお話してください。

当時は本が欲しくても買えませんでした。自分ができないことは、子どもに機会を与えていました。男女同権には違和感を覚えます。戦争でもできない人はどうするのか。戦争のもとをつくらないようにするにはどうしたら良いだろうか。戦争当時の体験を話す機会は本当に少ないです。戦争のもとをつくらないためにはどうしたら良いか考えるべきです。世の中の荒波を越えていってください。夢はたくさん持った方が良いです。



私からの返信

春原さんは防空壕で父親から「頼んだぞ」と言われたことを話してくださった時に今でも涙が浮かぶとおっしゃっていました。当時は、まだ小学5年生で戦争のこともよくわからない中で5人兄弟の長男として責任を感じたり、空襲の怖さを感じたりさまざまな思いがあったことがわかりました。そして子どもの人数が多くて先生の数が足りない、教室に入りきらないなどの証言からしっかりとした教育を受けていなかったことが考えられます。「活字に飢えていた」という言葉が印象に残りました。当時、食べ物はもちろんのこと、子ども達は十分な教育を受けられないことから、教育にも飢えていたのだということをこの一言からひしひしと感じました。

子どもが「本を読みたい」ではなく、「文字を読みたい」という思いで図書館へ通ったり、自分から必死に読み書きを覚える姿は、自分から学ぼうと思わなくても義務教育で文字の読み書きを教わることが保証されていた私には正直、想像することは難しいです。しかし、戦争は人々の心身を傷つけたり、生活を脅かすだけでなく、子ども達の「学びたい」という思いを^{そが}阻害し、教育にも深刻な影響を与えるものであると感じました。「やりたいことをやりなさい」という言葉から戦争当時に比べれば衣食住や教育、平和環境が恵まれている現代ですが、その当時なかった問題が多い現代を強く生きなさいという力強いメッセージだと感じました。

(文責 3年 下島佳乃)

鍋の中に入れる物は何もありませんでした

基本データ

- (仮名) 小林さえさん (100 歳)
住所 / 上田市八木沢在住
- 聞き取り日 / 2022 年 6 月 17 日
- 終戦当時の仕事等 / 東京在住、
電話交換手
- キーワード / 東京大空襲
- 林とみ子さん (83 歳)
住所 / 上田市八木沢在住
- 聞き取り日 / 2022 年 6 月 17 日

Q ご出身と家族構成をお聞かせください。

長野県下伊那郡川治村（現飯田市）の生まれです。終戦当時は東京で暮らしておりました、そこで東京大空襲を経験しました。

兄弟は、兄 2 人と弟の 4 人兄弟です。弟は、17 歳のときに特攻隊として出撃して戦死しました。「お国のためだから」と言っていた姿がとても印象に残っています。

私の同級生も特攻隊として出撃して亡くなった方がたくさんいました。

Q 戦時中に体験されたことをお話しいただけますか？

とにかく働かなくてはいけなかったから約 2 ヶ月実家にいきました。勤労奉仕は、鉄砲の弾をひたすら磨いていました。そんなある日、憲兵がやって来て「お兄さんが召集された。」と聞かされました。兄からは「俺の代わりにお前がこの家を守っていくんだよ」と伝えられました。

Q 3月10日の東京大空襲の様子をお聞かせください。

※当時のリアルな状況をお伝えするために、一

部ショッキングな表現が含まれることがありますのでご理解ください。

毎日 200 機ほどの敵機がやって来て、昼間は爆弾、夜は焼夷弾攻撃を受けました。そのため、毎日生きた心地がしなかったし、「日本は戦争に負ける」と思っていました。大型爆弾が投下されると家は 50 軒ぐらい、小型爆弾でも 20～30 軒ぐらい吹き飛ばされ、爆弾が投下された跡には大きな穴が空いていました。爆弾が投下された後は、その爆風で立ってられないほど大きな竜巻が起きるのです。

爆撃で吹き飛ばされた人の遺体が電線に引っかかっていた光景が忘れられません。中には妊婦さんもいて赤ちゃんが半分体から出てしまっていて、水がポタポタしたたれ落ちていました。助けてあげたいと思っても、男手もなかったから遺体を電柱からなかなか降ろせませんでした。その時の光景が今でも目に焼き付いて忘れられません。

3月10日の東京大空襲は、焼夷弾攻撃を受けた後は大規模な火事が起き、熱さや炎から逃れるため、たくさんの人が川に飛び込み

ました。私は、当時早稲田に住んでいたため、神田川に飛び込みました。川が人でいっぱいになり、川の水が溢れたほどでした。3～4時間ぐらい橋の欄干にぶら下がっていました。しばらくして川からはい出るとたくさんの方が川の外で亡くなっていました。遺体はどれも黒焦げで、性別も分かりませんでした。

私は、当時電話交換手として働いていました。自宅がある早稲田から職場の日比谷まで空襲後は片道約2時間かけて徒歩で通いました。勤めに行くときに、道路の脇にあった遺体を踏んだり触ったりしてしまったこともありました。

Q 大空襲の後は、生活はどうになりましたか？

お風呂にはしばらく入れなかったし、石鹸もありませんでした。空襲によって水道管が破裂して噴出した水で顔を洗っていました。

食べ物は、配給も途絶えしばらく食べる物に苦勞しました。醤油や砂糖はなかったため、味付けは塩のみです。主食はイモやトウモロコシを粉末状にして、水に溶いたものを食べていました。枝や紙くずを拾ってきて火を起こして一斗缶でお湯を沸かしました。でも、中に入れる物は何もありませんでした。

Q 終戦をどのように受け止められましたか？

昭和天皇様が、橋の上で土下座して「日本は負けました。申し訳ありません。」と仰っていましたよ。

Q 若者たちに語り継ぎたいことをお話してください。

若い人たちは、戦争当時の話に興味も持たないし、聞く耳を持つとうとすらしないと感じ

ます。だから今の若い人たちを見ていると「一体何をしているんだろう」と感じますね。

戦争によって不自由を経験したからこそ、「もったいない精神」を大切にしているんです。私は、30年間お皿を割っていないし、服や食器も新しい物を買っていません。

Q 林とみ子さんの体験されたことをお聞かせください。

私は、戦争当時上田市八木沢に住んでいました。風呂敷に必要なものを全部つめて別所の山に避難している途中で終戦を迎えました。

浦野や八木沢では地下壕建設のため、朝鮮人を受け入れている家庭がたくさんありました。

別所温泉まで行く道中には彼らの糞尿がたくさんあったのを覚えています。

お風呂にもあまり入れず、衛生環境があまり良くなかったことから、しらみが髪の毛や身体にたくさん湧いてしまう人が多かったです。とてもかゆくて、かくとしらみの潰れるプツプツという音がするんです。DDTという白い粉末状の消毒を頭につけ、風呂敷で頭を包んだのですが、それでもかゆくて我慢ができなかったことを覚えています。



私たちからの返信

今まで教科書やテレビ等で東京大空襲について触れ、学んできましたが、実際に体験された方にお会いして、お話を聴くのは、小林さんが初めてでした。また、涙ながらに言葉を詰まらせながらも当時の生々しい体験を語られていた姿が強く印象に残りました。

爆風によって遺体が電柱にぶらさがっていて、男手がないからしばらくそのままであったことを聞いたときは衝撃で言葉を失いました。そんな光景は今では考えられません。小林さんによって語られる東京大空襲での出来事一つ一つが私の胸にひしひしと迫ってくるものがありました。それ以上に今の若い人は聞く耳を持たない。当時の体験を聞きたがる人なんていない。当時の体験は私1人の胸にしまって黙って亡くなるのを待てばいいと思っている。」という一言が今回のお話を聴いた中で一番強く印象に残ったと同時に、悲しく感じました。当時を体験した人はどんどん少なくなっています。私たちは戦争に対して、「過去のこと」として捉えがちですが、風化させてしまっただけではまた同じ過ちが繰り返されるだろうと思います。過去のことを知ろうとする姿勢、耳を傾ける姿勢が今の私たちにはもっと求められるのではないのでしょうか。

(文責 3年 工藤千佳)

前回私が聞いた丸子町出身の方とは打って変わって、戦争時トップクラスの被害が出たところの一つ東京都に住んでいた方のお話しでした。私の率直な感想としては、自分が思い描いていた戦争とは随分違うというのが本音です。私のイメージとしては、今のウクライナ侵攻で行われているようなミサイルの着弾や戦車などの対人戦が基本としてあります。しかし、日本は島国ということがこの太平洋戦争では裏目に出てしまったようなもので、東京大空襲時の惨状は想像を絶する酷いものであったと思いを知らされました。

今のロシアのウクライナ侵攻を見れば、戦争はしてはいけないことだと容易に理解できますが、このような実際の体験談をお聴きすると戦争はしてはいけないということが言葉以上に訴えかけるものがあると思いました。

もし、世界大戦がもう一度起こってしまったなら、島国である日本は現在のウクライナ以上の惨劇が待ち受けているのかもしれない。このようなことが起こらないためにも、今後の世界情勢や政治に私たちは関心を抱いていかなければいけません。そういった時代に私たちは生きていることを自覚する必要があると考えます。

(文責 3年 篠原隆雅)

異郷の地から故郷の父母に 感謝し安泰を祈りました



基本データ

- 松野幾代さん（96 歳）
住所／上田市中央在住（佐久市臼田出身）
- 聴き取り日／2022 年 8 月 5 日
- キーワード／女子挺身隊

Q 太平洋戦争当時の様子をお話してください。

私の家は、明治時代より前から続く砂糖問屋でした。

家族構成は、兄 4 人姉 1 人の 6 人兄弟でした。

《女子挺身隊^{ていしん}》

昭和 19 年 11 月 20 日に富山県不二越へ女子挺身隊として派遣されました。当時父親は息子 4 人が軍に出され、姉が軍服を作る会社へ行ってしまったため、私しか砂糖の問屋をやる人がいませんでした。娘を危ない目に遭わせたくないという思いから私が富山へ行くことを最後まで反対していました。

しかし、在郷軍人^{ざいごう}からの命令には逆らえませんでした。挺身隊は男女問わず召集されました。挺身隊は佐久と長野から 25 人ずつ、松本から 50 人で集められました。その中のほとんどは、女性のお百姓でした。私は、国民学校を卒業し教員免許を持っていたため副隊長になりました。隊長は東京の女子大学を出た人であったと思います。不二越には兵隊になれなかった男性や言葉の通じない朝鮮人

がいました。一緒に作業をした人々は口調が荒い人が多く、女性を下に見る人が多かったです。夜 9 時になると決まって両親がいる長野の方を向いて、座って泣きながら「故郷の父母に感謝し安泰をお祈りします」と言いました。

《兄弟》

私には、兄が 4 人いました。4 人とも兵隊として戦地へ行きました。そのうち 2 人は沖縄で亡くなりました。一人は撃たれて即死、もう一人は撃たれてもすぐには死にませんでした。でも、撃たれた箇所^{だいたいこつ}の強い痛みで仲間に殺してほしいと頼んだといいます。

しかし、仲間は兄を殺さなかったそうです。やがて、撃たれた大腿骨^{だいたいこつ}が腐ってきてしまい、入水自殺してしまいました。私が最期に兄に会ったのは年末に 3 日間の正月休みに実家へ帰った時でした。

兄は大学を繰り上げ卒業していました。兄は、まだ若いことを考慮されたのか実家に帰らせてもらえたんです。その時、上司や周りにばれないように「こじき」の格好をして実家へ帰らせたようです。兄は、私に「いつか



女子挺身隊の方々が工場に向かう様子（写真は松野さん提供）

テレビで戦争を見ることができる時代が来る」と言っていました。そして兄は広島へと戻っていきましたが、6月になくなりました。台湾に行っていたもう一人の兄は助かったんです。

父は、兄の戦死の報告を受けたとき、夜も眠れずに「ああ、ああ」と言う姿が今でも思い浮かびます。戦死者の遺骨はありませんでした。父は残念がっていました。姉は名古屋にある軍服を作る会社で働いていました。「天皇様は、子どもを皆奪って行ってしまった。そのことを考えてほしい」と父が言っていました。

《工場での日課》

就業時間は、8時から16時、または17時まで。お昼は会社から弁当が支給されました。その中に入っていた鯖を食べて、富山の食は美味しいと感じました。長野の実家の人たちは薬売りの人に富山の私のもとへの荷物を頼み、宿舎に家からの食材が届けられました。

でも、その食材のほとんどが知らないうちに夜勤の隊員に食べられてしまったんです。

《富山の空襲》

昭和20年8月1日・2日、富山で空襲がありました。空襲がくると掛け布団をかけて立山から空襲の様子を見ていました。焼夷弾が落ちると花火みたいでキレイだと思いました。立山に避難しようと外にでた時に空襲はもう長野を通り過ぎたと聞かされました。田んぼのあぜ道を通って道を外しながら長野の方に向かって無事を祈っていました。空襲により亡くなった死体をよけました。土蔵の下で空襲により亡くなった人が燃えているのを見ました。空襲を受けた人は神通川（岐阜県高山市から富山湾を流れる一級河川）に入ると良いと言われ川に入るんですが、熱くて死んでしまったんです。

食べ物は、ふすまとお芋、ふすまとお豆、三角のおせんべいやパンを食べていました。

空襲により町がなくなり会社が成り立たなくなっていました。そこで、隊長だけ残り、あとの隊員は実家に帰りました。混乱の中、後ろの人が前の人のお尻を押し上げるようにしてトイレの窓から外へ出て帰りました。しかし、長野へ向かう電車はなく、北海道から金沢、愛知へ向かう兵隊さんに助けられ帰ることができました。

Q 終戦はどのように迎えられましたか？

玉音放送を隊長さんと土の上で聞いていました。内容が聞き取りづらく何を言っているのかよくわかりませんでした。後で皆集められて終戦を知らされました。

Q 私たちへの伝言

戦争は絶対にやることではない。今は戦争経験を聞く機会が減ってきています。若い人が立ち上がって欲しい。今は豊かすぎるんです。死んだ人は二度と戻りません。



私からの返信



松野さんは、挺身隊の集合写真、隊の様子を大事に保管なさっていて、それを実際に見ることができました。当時の様子が聴き取りとともに少し想像できるような気がしました。

当時は、日本が戦争に負けたり天皇のことを批判するなどできる世の中ではなかったはずだが、松野さんのお父さんの言葉からは子どもを奪われたという強い憎しみを感じました。松野さんは親元を早くに離れて働き、空襲に遭って死んでしまった人を見たとおっしゃっていました。現代の私たちは、両親の元で自分の好きなことをしたり、学ぶことができます。今の私たちは豊かすぎて戦争の悲惨さがわかっていないのではないだろうかと思います。そして、戦争体験の語り手が少なくなり、若者が戦争を学ぶ機会も減ってきている状況から私たちの取り組みをとっても良いことだと言ってくださいました。

改めて後世に語り継ぐことの大切さを感じました。

(文責 3年 下島 佳乃)

一夜にして敗戦国へ



基本データ

- 前島章治さん（82 歳）
住所／上田市八木沢在住
- 聴き取り日／2022 年 7 月 8 日
- キーワード／朝鮮人の強制労働

Q 終戦当時の前島さんの生活についてお話をください。

私が三歳の時に母を亡くしました。

兄もいたんですが、兄は予科練に入り家を出てしまいました。しかし、終戦後に帰ってくるようになった。兄は予科練から帰ってくると、予科練でもらってきたリアカーでお土産をたくさんもってきました。

父は五歳の時に、亡くなってしまい、父の後妻である女性とも一年少々で離れることになりました。兄や祖父母がいたので、何か特別困ることはなかったんです。

八木沢の山からみんなで兵士としての出征祈願を行いました。

出征兵士を送り出すために演奏を行う軍楽隊にみんな入りたいと思っていました。

月に一回は近所のみんなでバケツリレーの消火訓練をするようになりました。

Q 上田市仁古田の飛行機地下工場の工事について当時の状況をお話してください。

仁古田には、トンネルが掘られてありました。八木沢にも同じようなトンネルがありましたが、仁古田の方が本格的なものでした。

八木沢のトンネルは朝鮮人が 200 ～ 300 人規模で掘り続けていた。14 歳の子どもも含まれていました。

このトンネルも終戦後になると、地元の子どもの遊び場となりましたが、崩壊する可能性があったため、立ち入り禁止となりました。

1945 年（昭和 20 年）8 月、終戦が伝えられると、朝鮮人の人々の態度は一日で豹変しました。

鉄板や松の板を偉そうにお米と強制的に交換するように要求してきました。さらには朝鮮人の人たちがお風呂の中でこれまで聞いたこともない歌で「日本人が負けた」みたいな歌を歌ったりしていました。

家畜の牛や農家の米などは、一夜にして朝鮮人の手によって盗まれてしまいました。

その後、朝鮮人が住んでいた地下壕を見ると、中は牛の骨だらけでした。

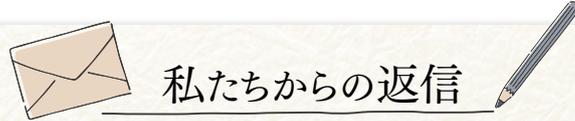
敗戦国というものは、何でも奪われる存在なんだということを実感しました。

仁古田には見せかけの飛行機が 10 台くらい並んでいました。酒屋の倉庫に隠したりするなどして、空から、本物の飛行機の場所が特定されないように工夫をしていたんです。

Q 若者たちへの伝言がありましたらお聞かせください。

当時の日本は、現代のロシアと同じように

侵略をしていた。戦争は嫌いだ。絶対にしてはいけないと思う。



私たちからの返信

戦時下で、両親を亡くしてしまいがちながらも、兄弟と協力して戦後を生き抜いた前島さん。

今回、仁古田の状況を中心にお話をいただき、朝鮮人と日本人の関係から、戦勝国と敗戦国の立場をよく理解することに繋がりました。たった一日で立場が変わってしまうことに対し、恐怖を覚えました。

現代社会における日本と近隣諸国の関係はいまだに回復していません。そのような状況もこの戦争から来ているものだと改めて考えることができました。一度壊れてしまった関係を修復することは難しいものであると感じました。

このような過ちを繰り返さないように、今回の聴き取りで聴いたことを身に刻み、後世に伝えていく役目が私たちにはあると感じました。

戦争を繰り返してはいけない。

(文責 3年 岡田 輝)

前島さんのお話で衝撃的だったのは、終戦後朝鮮人が手のひらを返したように威張っていたことでした。これは、他の敗戦国でも占領した国の人からそのようなことになっていたのか調べてみたいと思えることでした。戦勝国でもない朝鮮出身である朝鮮人が日本の負けに対してそんなにも喜ぶということは、それほどまでに日本が行ってきたことに対して恨みがあるのか。少しステレオタイプかもしれないが、このお話だけでも、朝鮮人の性格や今なお存在している反日感情が分かった気がします。

ここで私が発信したいのは、このようなお話から分かる外国の姿というのも今の世界情勢を考える上で、大切だということです。すべてが日本人と同じ価値観、民主主義と同じ価値観であるというのは大きな間違いで、他国は他国の価値観があり、それを理解することによって、戦争や戦争を防ぐ各国政府の動きの見方というのが少し変わってくるのではないかと思います。

(文責 3年 篠原 隆雅)

朝鮮人のお話が特に印象に残っています。当時、仁古田や八木沢では地下工場を建設するために多くの朝鮮人が穴を掘っていました。強制連行された彼らは毎日過酷な労働に従事し、中には子どももいたという。しかし玉音放送の翌日立場が逆転しました。朝鮮人らの態度が横柄になり、逆に日本人は下手にでるようになったのです。農家の牛が奪われ、翌日トレードに来た話などは関係性の急激な変化を伝えています。このように敗戦国は奪われ、勝戦国が奪うという構図は戦争の常であると思います。前島さんのお話の中で「昔の日本は今のロシアとまったく同じ事をやっていた。戦争は人間の業だ」と口にしていました。

最後に「どんなに時が経っても戦争はなくなる」とも話していました。

同時に聴き取りをした宮島満里子さんが「戦争は太古の昔から起きていること。戦争することは太古の昔から変わらない」と仰っていました。時代を変えながら虐殺や破壊、略奪が延々と繰り返されています。前島さんが「人間の業」と言っていたように、私たちには戦争をしてしまう性質が最初から備わっているように思います。だからこそ、歴史を振り返ったり当事者に感情を寄せたりして、過去を見つめることが大切だと考えます。利益や本能に流されず、歴史から教訓となるものを見つけることが今の私たちに求められていることだと感じました。

(文責 3年 高田 一吹)

空襲警報の最中のピアノ演奏 「ショパン華麗なる円舞曲」



基本データ

- 宮島満里子さん（96歳）
住所／上田市中央在住
- 杉山洋子さん（85歳）
住所／上田市古里在住
- 終戦当時の仕事等／小学校教員
現）上田市女性誌研究会事務長
- 聴き取り日／2022年7月8日
- キーワード／東京大空襲

Q 太平洋戦争当時の体験をお話してください。

私が6歳のころから、支那事変や満州事変などがあり戦争の世に突入していました。太平洋戦争のときは、専門学校に通う学生でした。他の女子学生たちと一緒に軍隊マーチに合わせて出征兵士が行進するのを拍手で見送りながら「戦争はここまで来てしまったか」と感じました。

Q 学校生活はいかがでしたか？

当時の学校は軍事教育だらけでした。教育勅語を覚えさせられ、暗記できないと立たされた。天皇が絶対的な存在で、天皇の像を拝んだりもさせられました。

現在の北朝鮮と同じような雰囲気教育の場に流れていました。学校に通えたのは、4年間のうち2年間だけでした。学生時代の多くは勤労働員で、飛行機や銃、双眼鏡、潜水艦等に使われるレンズを製造する会社の工場に働きに出ていきました。空襲のサイレンが鳴ると会社の地下に避難し、サイレンが鳴りやめばまたレンズを磨くという生活だったんです。

Q 終戦のころは、いかがでしたか？

1945年には空襲が激化してきました。私は、勤労奉仕で東京にいました。朝8時30分から夕方17時まで勤務し、寮に帰る生活でした。寮の食事は良かったけれど時間が経つとお腹が空いてしまいました。そこで実家からおやつに食べる乾いたままの大豆を送ってもらい食べていました。家族は東京を離れて長野に疎開していましたが、私は、命令で勤労働員に従事していたために一緒に疎開できなかったんです。勤労奉仕は働いた報酬として70円もらえました。当時の70円は、一家4人で食事できるくらいの金額でした。

Q 東京大空襲は、体験されましたか？

東京大空襲のとき、山の手の方にいました。空襲警報になると防空カバン（ちり紙、ハンカチ、下着など）を持って防空壕へ避難しました。防空壕の中では爆弾が落ちる時の音は「ヒュルル、ドーン」と聞こえたんです。爆弾が落ちた場所は、大きな穴が空いたんです。防空壕に入ったから絶対に安全とは言い切れず、真上に爆弾が落ちてしまうと地面の上にいれば黒焦げ、下にいれば蒸し焼き状態

になってしまいます（遺体は白くなる）。

空襲を受けると熱くてやけどしてしまうため川に飛び込み、溺れてしまう人もたくさんいました。会社の業務で書類を警視庁に取りに行ったとき、電車の窓から空襲後の下町が見えました。ビルの面影だけが残る焼け野原という表現が相応しい下町の惨状に直面して、「戦争ってこんなものなのか」と怖くなりました。空襲は夜に来ることが多く、電気はつけられない。夜はほとんど眠れませんでした。

ある時、私の住んでいた寮に爆撃が直撃したんです。そのときのザザザーという雨のような音と、花火が打ちあがったような空を覚えてます。私と友人は、毛布を水で濡らし、それを被って無我夢中で逃げました。逃げた後、寮へと戻る帰り道には丸焦げになった人間の死体がいくつもありません。友人といっしょに、その中を茫然と歩いていました。涙も出ず恐怖も感じない極限状態だったように思います。

過ごしていた寮が空襲で燃えてしまったため、違う寮で過ごすことになったんです。その寮は元々公爵の家だったものらしく、素晴らしいシャンデリアが吊り下げられている豪華な建物でした。そこにはピアノが置いてあり、友達がショパンの「華麗なる円舞曲」を演奏してくれました。演奏中、空襲警報が鳴っていましたが、みんな庭に出てそのピアノの演奏に聞き入ってしまいました。この時のピアノの音色は、今でも忘れられない思い出です。

Q 終戦はどのように迎えられましたか？

終戦前日の8月14日、「学校に登校せよ」という意の通知が届きました。私は、広島と長崎に落ちた爆弾から、薄々と日本の敗北を

感じていたが、もちろん口に出すことはできませんでした。東京大空襲により渋谷にあった講堂は焼けてしまいましたが残っていた建物もあり、そこに集められた生徒は200人中70人。残りの生徒は空襲で亡くなっていたり、疎開中で集合できなかった生徒たちでした。

8月15日、大講堂にみんなで集まって玉音放送をラジオで聞きました。玉音放送は、遠くで誰かが何かを言っているような感じで、何を言っているのかよくわかりませんでした。終戦を感じ取り、何とも言えない気持ちになりました。ただ、「今夜からは電気がつけられる」と思ったのを覚えています。集合した生徒たちの多くが張りつめた糸が切れたように床へと座り込んでいました。

15日夜、私は実家に帰りたい一心で長野に向かう汽車に窓から乗り込みました。上野駅は大勢の人で混雑しており、汽車内もそうでした。上野駅には地下道がありましたが、当時その地下道にはホームで汽車を待つ人々の尿が溜まっていてひどい臭いでした。私は、今でも上野駅の地下道にはあまり行きたくないと思ってしまうこともあるんです。16日の朝、誰かの「軽井沢だ」という声が聞こえました。窓から冷たい空気を感じ、故郷に近付いた喜びに涙が出ました。長野に到着したとき、汗やほこりでとても汚れていましたが、早く母親に会いたくて休む間もなく別所行のバスに乗りました。バスから降りて母親に会ったとき、「すぐお風呂に入りなさい」と言われたことを覚えています。

Q 若者たちにメッセージをお願いします。

二度とこのような体験はしたくありません。戦後、私は国語教師の道を歩きました。戦時中も学校の国文科の教科書は肌身離さず持っており、その教科書は国語教師として生

きるのに非常に役立ちました。この教科書は今でも大切にしています。教師になるためには、これまでの軍事教育とは全く違った民主教育を身に付けなければならなかったんです。

教師になる過程で、民主主義を叩きこまれ、軍国少女ではなくなりました。戦争を経験したからこそ、民主主義のありがたさを強く感じたと思います。

戦争が終わって77年、あの日から命をつないで96年。本当のことが言えない雰囲気、話が通じない世の中は戦争につながると考えています。人間が生まれて社会を築き文化が栄えても戦争をしたら結果は同じです。「殺す」「略奪」「壊れる」「^{りょうじよく}陵辱」は変わりません。

【杉山さん：上田空襲にまつわるエピソード】

小学校1年生のとき、上田空襲にあいました。空襲警報がなり、家の窓から夜空を見ると爆弾が花火のように光っていました。幼かった私は、空襲の深刻さがよくわからず、「母ちゃん、花火だ」と母親に声をかけました。すると母親は慌てて、「違う、空襲だ！弟にはやく^{たび}足袋をはかせなさい」といい、家族全員で急いで防空壕へと避難しました。その道中でも私は、ずっと空を見ていました。

空襲の後、田んぼ等には不発弾が残っていました。不発弾は消防団員の方が回収し、警察の元に集められて管理されていました。ある日、消防団員の1人がこっそり不発弾を持ち出して、近所の子どもたちに「珍しいものがある」と見せびらかし、不発弾を叩いて爆発させてしまうという事件が起きました。その事件で子どもが2人亡くなってしまいました。私の父は、警察官だったので、この事件に非常に憤っており、父は、私に何度も「珍しいものがあると言われても絶対についていくな」と注意していました。



私からの返信

東京大空襲を経験され、多くの死体を見たときに何の感情も浮かばないくらい極限状態だったといいます。家族もいない地で教育も受けられずに働き、空襲により戦争による死を身近に感じた宮島さんから戦争を行ってはいけないという強い思いを感じました。それと同時に憲法9条改正が言われる現代に今まで戦争を行わずに平和に暮らして来れたのは憲法9条のおかげであることや戦争の恐ろしさや怖さを私たちに伝え、^{けいしょう}警鐘を鳴らしているように感じました。

(文責 3年 下島佳乃)

宮島さんが経験した空襲のエピソードから、戦争の悲惨さが伝わってきました。目の前で死んでいる人がいるのに、涙や恐怖を感じないほどの状態に追いつめられることにぞっとしました。戦争を直接知らず、平和な世の中に生まれた世代である私たちは、今ある平和を当たり前のように思ってその大切さをきちんと理解できていないかもしれません。

しかし、こうして当時のエピソードをお聴きして当時の状況を学び想像力を働かせることで、平和の尊さについて理解を深めることができるのではないかと思います。

(文責 3年 宮城佑妃子)

宮島さんの話をお聴きして、宮島さんが当時いくつだったのか気になり尋ねてみたところ、20歳だったそうです。私も今20歳です。もし私が当時と同じ体験をしていたらと思うと出てくる言葉が見つかりません。また、「人は極限状態になると涙も出てこないし、恐怖心も何も感じなくなる。喜怒哀楽が感じられることは幸せで平和な証。」とおっしゃっていた姿が強く印象に残りました。笑ったり、泣いたり、何かを怖がったり、怒ったり、毎日様々な感情を抱きますが、抱いた感情がどんなものであれ、感情を抱けることそのものを大切にしたいと感じました。

(文責 3年 工藤千佳)

国に従わない者は、非国民



基本データ

- 黒坂 明さん（88 歳）
住所／上田市前山在住
- 聴き取り日／2022 年 8 月 5 日
- 終戦当時の仕事等／11 歳
- キーワード／戦時下の学校生活・
空襲警報

Q 太平洋戦争当時どちらにお住まいでしたか？

戦争当時は、千葉県ちばの習志野市に住んでおりました。実み籾もみ駅えきからすぐのところですよ。

父は写真屋を営み、陸軍御用達のお店であったため、陸軍との関係もありました。

Q 終戦当時は 11 歳ということですが当時の学校生活についてお話しください。

昭和 15 年（1940 年）小学校に入学しました。その後に大東亜戦争（太平洋戦争）が始まったことで、学校の名前が国民学校に変わりました。

《朝礼》

学校では、「日本は神の国だから戦争には絶対に勝つ」と教えられていました。毎朝、朝礼が行われ、「西向け、西」の合図と同時に宮城（皇居の方角）を向き、歴代の 124 代の天皇陛下の名前を暗唱させられていました。これは、授業中にも暗唱させられていたが、すべて覚えることができた生徒はおらず、私自身も 15 代くらいまでしか覚えていなかったと思います。

《軍神》

各教室には、『九軍神』と呼ばれる兵隊 9 名の写真が飾られていました。この 9 名は真珠湾攻撃を行った特別特攻隊の 10 名の中の 9 名であり、「2 人組で飛行機に乗るのに 9 人なのはなぜだろう」と疑問に思っていました。1 人は、捕虜になってしまった軍人だったことは戦後に知ったことです。

《音楽の授業》

音楽の時間は「ドレミ……」ではなく、「いろはに……」が使われるようになった。ドレミは外国の読み方であるという理由で使われなくなったんです。

《夏休み》

『夏休み』という言葉は用いてはならず、『夏期心身鍛錬期間』という名称であり、夏休みという言葉を使うと叱られた。宿題の内容は、「食糧となる野草を干して持ってくる」というものであったが、草は干すと縮んでしまうため、指示された量にはなかなかとどかなかったんです。また、燃料となる「松根油」

の採集もあり、非常に大変な夏であった。

《連帯責任とビンタ》

戦争が進むと、勉強はほとんどしなくなった。軍国教育がおこなわれていたため、クラスの誰かがいたずらをする、ビンタなどの暴力を浴びせられ教育された。また、連帯責任を取らせクラス全員が暴力をふられ、黒坂さん自身も「物差し」で、頭を縦向きではたかれ、頭からは血を流した経験もありました。

《先生不足》

戦争が進むと兵隊の数が増えたため、学校の校舎の半分が、軍人の宿舎に使われました。その為、授業は午前・午後の二部制になっていきました。学校の若い男の先生は、兵隊に取られたため、先生の数不足、資格を持たない「^{だいよう}代用教員」が学校の授業をすることも多くなっていきました。18歳の女の先生が教えることもあったんです。

《学校に軍人》

学校の門には、門番として兵士が常に2人付いていた。門番の兵隊は私たちのような子どもたちによく話かけてくれていました。しかし、上官が見えた際には表情が変わり、敬礼をしていました。上官の位によって、敬礼の仕方が異なっていました。毎日のようにみていた黒坂さんは、軍人の位の呼称を二等兵からすべて暗記することができました。

Q 戦時中の暮らしについてお聞かせください。

農家の手伝いをよくすることがあったが、当時の子どもは貴重な食料になる野菜の畑を「決戦畑」と呼んでいました。また当時の子

どもたちは、みんな『兵隊ごっこ』として竹を鉄砲に見立て遊んでいました。当時は、兵隊に憧れ、私自身も大人になったら軍隊に入隊すると思っていました。

村の人たちは、若い兵隊が戦争に行くときには、最寄りの駅まで見送りに行ったんです。

《食べ物・^{はいきゅうせい}配給制》

はじめのころ、米は配給制であったがそのころから満足な量を食べることができませんでした。戦争が激しくなるにつれ、配給は米からふすま（小麦の皮）という本来、鶏の飼料として使われるものになっていきました。全然おいしいものではなく、とても食べられるような味ではありませんでした。サツマイモも配給されましたが、今のようなものではなく非常に水っぽく味もおいしくありませんでした。このころになると、^{やみいち}闇市が流行し、農家で衣類と食料を交換してもらっていました。

当時は、『衣料切符』が配られており、衣料品を買うには必ず必要であったが、何を買うにも点数が足りず、衣類も十分に買うことができなかったんです。

味噌、醤油、塩などの調味料が足りなくなりました。「海の近くの住民は海の水を使え」と言われるようになったため、最寄りの^{みもみ}実籾駅から電車に乗って、約4km離れた、幕張海岸まで、海水を取りに行き、一升瓶に水を汲み、持ち帰ってきていました。

《大本営発表》

当時の戦況は、大本営発表というラジオによって伝えられていました。日本軍が破った敵軍の飛行機や戦闘機の数などが知らされており、日本軍の損害や敗戦などの知らせは一向に知らされてこなかったんです。



小学校低学年ごろの黒坂さん

《国民総動員》

東京空襲が始まると、『大日本婦人会』が結成され、女性は竹やりを持ち、もんぺを履き、常に戦闘に備えていました。

「国に従わないものは、非国民である」とされ、総動員で国のために動くようになっていきました。鉄などの金属きょうしつの供出が行われるようになり、お気に入りだった電車のおもちゃを泣きながら差し出すことになりました。

父は大正時代に、写真を学びに渡米した経験があり、当時のアメリカについてよく知っていましたが、「日本はアメリカに比べ、遅れている」とよく言っていました。また戦争が激しくなると、母がよく「日本は戦争に負ける」と言っていたが、それを聞いた父が「やめる、憲兵に聞かれたら大変だぞ」と言っていた会話をよく覚えています。

Q 空襲についてお話しください。

昭和19年(1944年)ごろから米軍による

空襲が一層激しくなっていました。「東部軍管区情報」として放送が始まり、「警戒警報」がかかったのちに、「空襲警報」のサイレンが街に鳴り響き空襲が知らされていました。

防空壕(大人の背丈の高さ、幅約2m、奥行き3m)が近隣にあったものの、天井がなく、空が丸見えでした。米軍のB29による爆撃おびに怯えていました。日本の高射砲こうしゃほうが抵抗するんですが、上空1万mまで、届かなかったんです。そのうち、日本の戦闘機が米軍に向かっていくも、日本の戦闘機が落とされ、それを目の当たりにし、非常に無念な気持ちになってしまいました。

空襲が盛んになり、家の中を黒い布で覆い、光が漏れないようにしていました。また、いつでも逃げられるように、荷物を風呂敷に包み、常に枕元に置き寝ていました。その時期から、停電ひんぱんが頻繁に起こっていました。

《東京大空襲》

昭和20年(1945年)の3月10日の東京大空襲は、今でも忘れられない日になっています。多くのB29が習志野ならしのの空を通過し、西(東京)方面に向かっていきました。空襲が始まると西の空が真っ赤に染まりました。その空の景色を今でも鮮明に覚えています。

最も怖かったのは、P51という戦闘機でした。一気に急降下し、機関銃によって人を直接撃ちに来るもので、私自身も狙われることもありました。木の陰に隠れた際には、自分には当たらなかったものの、周りで死者が出たこともありました。1km離れた醤油屋に姉と買い物に行った際も、P51が真上を通り過ぎていきました。

昭和19年から終戦までは、頻繁に東京が空襲され、20年の8月ごろは昼夜を問わず毎日空襲がありました。

Q 終戦をどのように迎えられましたか？

昭和20年（1945年）8月15日の正午に天皇陛下による玉音放送が流れ、ラジオで放送を聞きました。天皇が何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。午前中まで起きていた空襲がその瞬間から、ぴたりと止まったことや、大人たちの話から徐々に日本が敗戦したことについて理解していきました。その瞬間は、日本が敗戦したことへの虚しさと同時に、戦争が終わる安堵の気持ちの両方があったように思います。その夜からは、照明をつけることができたんです。

「アメリカは鬼だ」と教えられていた、私たちにとっては、終戦後に見る米軍は怖いものでした。終戦後も昭和22か23年ごろまでは食糧難や停電が続きました。30分に一回のペースで停電が起きるので、勉強もあまりできませんでした。

Q 若者たちへの伝言をお聞かせください。

今の若い世代の人たちが非常にうらやましいと思います。自分の時代は、勤労奉仕ばかりで、まったく勉強ができなかったんです。戦後に自分が、『民主主義』という教科書を読んだとき、とても感動しました。勉強できる喜びに溢れました。当時は、男性はみんな坊主頭でおしゃれをすることもできなかったんです。

若い世代の人たちが、日本が二度と戦争をしないためにも少しでも多くの周りの大学生や高校生に伝え、関心を持ってもらい、後世に伝えていってほしいと思います。

**私からの返信**

主に小学生時代の戦争体験を語っていた黒坂明さんのお話をお聴きし、「教育」について大学で学ぶ私は、改めて軍国教育の恐ろしさについて考え直すことができました。

毎朝の朝礼での歴代天皇の暗唱や勤労奉仕、暴力による教育など現在の学校では信じられないような学校教育が行われていたのだと、黒坂さんのお話をお聞きする中で具体的な情景を思い浮かべながら当時を考えることができました。また、黒坂さんからの若い世代へのメッセージにもあったように、現在の自分の好きな分野を勉強することができるということは、当時の人たちにとっては、非常にうらやましいことであり、今を生きる私たちにとっても、決して当たり前なことではないことを改めて実感することもできました。今回のお話を聴いてより一層、当時の軍国教育や学生たちの暮らしについて調べていきたいと感じました。

私は今回黒坂さんからお聴きしたお話を、少しでも多くの人たちに知ってもらいたいと感じました。お話を聴いたことで、自分自身も語り手となり、若い世代に知ってもらえる一人となったように思います。今回のような貴重な体験談を知ることができた私たち自身が、二度と戦争という悲劇を繰り返されないために、後世に語り継いで行くことが重要な役割なのではないかと強く感じました。

（文責 3年 渡辺康彦）

戦時下の小学校生活



基本データ

- 高野賢一さん（87歳）
住所／上田市五加在住
- 聴き取り日／2022年8月30日
- キーワード／スパルタ教育、威張っている少尉、金属回収、集団疎開の学生との交流

Q 国民学校での暮らしはどうでしたか？

国民学校に入学したのは1941年のときです。1～3年生は女性の先生で、戦時中のスパルタ教育のため、往復ビンタは日常でした。成年男子がみんな兵隊にとられ、老人や夫人の留守家族が農作業をしていましたが、手が回らないので、3年生から勤労奉仕に行きました。4年生の先生は、学力の遅れを心配し、ボール紙に分数の式を書いて仕事の合間に教えてくれました。

4年生の時、教育勅語を一晩で暗記するように宿題を出され、翌日順番に唱えたが、一人も出来る子がいませんでした。当時は成績の良い順に、北側の後ろから並び南の一番前が出来の悪い序列になっていて、北側の二列は全員ビンタをもらいました。出来の悪い南側はお構いなしでした。教育勅語は、今でも半分以上覚えています。出来の良い北側の二列は「出来て当たり前、お前たちの努力が足りない」ということでビンタをもらっていたと思われます。

「男女七歳にして席を同じゅうにする^{なか}勿れ」ということで4年生の時は、3クラスあったものが男女別々の2クラスになり疎開の児童

もいたので、1クラス70人以上いて教室は満杯でした。

校庭にはトラックと、防空壕と、残りは畑にして遊ぶ空間はほとんどなかったです。

Q 国民学校での昼食は何を食べていましたか？

戦時中は食べ物が少なかったため、いなごを午前中の授業で捕まえて食べていました。100匹がノルマでしたが、虫は何でも入れてズルをする人もいました。いなごは貴重なたんぱく質なので、粉にして味噌汁にいれました。

Q 集団疎開の生徒達はどのような状況でしたか？

別所温泉の旅館やお寺に来て、各旅館は一杯でした。

疎開の生徒が家の近くの歯医者へ来て治療の後、奥さんがさつま芋をあげたところ、翌日大勢が患者になって押しかけてきて、奥さんが困っていました。

集団疎開してきた生徒達と一時喧嘩をしましたが、仲直りをして彼等が「少年クラブ」

などの本をくれ、こちらはさつま芋などのおやつを提供して交流を深めました。

Q 戦時中の金属回収はどのようなものでしたか？

五加橋の欄干^{らんかん}が金属回収で外され木製になったり、金属供出^{きょうしゅつ}で家にある金貨・銀貨・銅貨などすべて供出させられました。タンスの引き手も対象になりました。

個別に供出量が決まっていました。(男の子がいれば、役所の方が供出量を減らしたりしました。) アルミの弁当箱も供出していました。木の箱など工夫して代用していましたが、弁当を持ってこなかった子もいました。弁当を持ってこなかった子は昼ご飯の時、外に遊びに行くしかありませんでした。



供出により金属の引き手が外された (高野さん宅)

Q 小学校に陸軍が駐屯^{ちゆうとん}していたとき、どのような状況でしたか？

中塩田小学校に陸軍の自動車部隊が駐屯していて、校庭には何台もの自動車が止まっていました。当時はバスもトラックも木炭を燃料にしていたのですが、軍のトラックはガソリンで、我々子どもは珍しい排気ガスの匂い^かを嗅いで喜んでいました。

上官は士官学校出たての少尉がとても威張っていて、背が低いので年長の部下の兵隊さんをビンタするときに届かないので相手をしゃがませ、スリッパで叩いていました。自動車部隊は学校の教室に20人くらいの兵隊

が寝泊まりして生活していました。少尉だけは職員室で生活していました。

Q 戦時中の暮らしはどのようなものでしたか？

履物は下駄^{わらぢょうり}か藁草履で、ほとんどの生徒は自分で作っていた藁草履で通学していました。衣料品は衣料切符が無いと商店で売ってくれませんでした。例えば足袋一足やさらし^{いちたん}一反など切符に記載されたもののみ買えました。衣料切符は少ないながらも必ずもらえました。たばこも配給でした。でも、ほとんどなく、大人たちは五葉(ゴバと呼び乾燥した矢車草の葉を刻んで煙草の代用品としていた)を乾燥して刻み、辞書の紙で巻いて代用していました。英語の辞書を特に使用していて、子どもも大人のためにたばこを作りました。

縁故疎開^{えんこ}の児童達は、靴もズック(スニーカー)を履いていて羨ましかったです。

一晩でモノの値段が変わっていました。松根油^{しょうこんゆ}については、別所温泉駅からちょっと上ったところに工場がありました。

Q 戦後直後はどのような状況でしたか？

終戦の日から我が家のそばの河原の橋の下で、兵隊達が数日にわたって陣中日誌を焼却していました。

終戦後はインフレが激しく、預金^{ふうき}が封鎖されました。また、50銭が使えなくなりました。

Q 若者たちに伝えたいことはありますか？

今の若者たちの考えは保守的で、自民党や今の生活が良いと思っていますが、このままでいいのか、戦争とは経験して初めて実感するものであり、戦争に向かわないために政治のことをもっと考えなければならないと思います。



私からの返信



今回の高野さんのお話は、当時国民学校の4年生とは思えないほどの鮮明な記憶をお持ちで、当時の情景や生活が詳細に想像できるくらいにお話しされていました。鮮明に記憶が残るほどの印象付けられた体験だったと推測されます。それほど、戦争の悲惨さや戦争で巻き込まれる生活状況の変化が大きかったと思います。お話を伺い、特に印象が残ったのは、成績が良い生徒に対してビンタがあったことです。成績が悪い生徒にビンタがあったと思いきや、そういう生徒は見捨てられ、成績が良い生徒が将来有望で、役に立つという考え方があったのかは分かりませんが、そのような思考が当時の軍国主義社会の思想であったのではと思いました。

次世代に発信したいこととして、高野さんは若者の政治への関心や思想について忠告をされていた。私もこの高野さんの伝言に賛同の意があり、若者の政治への無関心さ、保守的な思考というのも問題だと思います。しかし、それだけではないとも考えています。若者だけでなく、中年層の人々に至っても政治へは無関心な人がいること、また、有望な政党が少なく、政策も人口比率的に老年層へのものが多いと感じています。そのため、全年齢層が将来を考え、政治へ意見する必要性が問われているのではないかと考えます。

(文責 3年 篠原隆雅)

武石のすり鉢



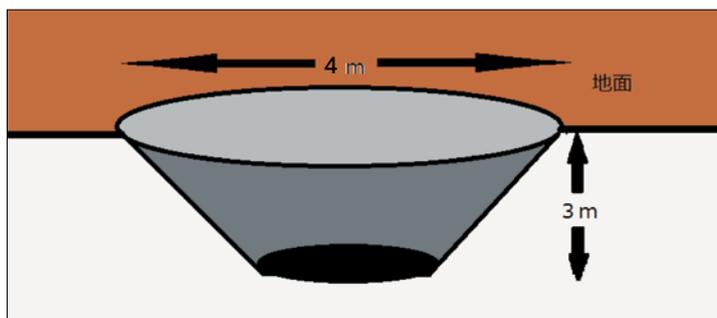
基本データ

- 宮原文男さん（84 歳）
住所／上田市下武石在住
- 聴き取り日／2022年8月4日
- キーワード／あそび・訓練

Q 武石のすり鉢とは何ですか？

武石小学校の校庭の端の方に作られた大きなすり鉢状の穴がありました。直径は約4m、深さは3mの大きな穴。この穴は、少年飛行兵を作り上げるために作られたものです。この穴に子どもたちが飛びこみ、穴を走り回りながら脱出することを目指しました。これをするによって、^{へいこうかんかく}平衡感覚、体力、^{しゅんぱつりょく}瞬発力を^{きた}鍛え、少年飛行兵の選別を行っていました。走るだけでなく三角乗り（子ども用自転車が一般的ではなかったため、サドルに座ってペダルを漕ぐことができなかつた子どもたちが大人用自転車の三角形のフレームに片足を入れてペダルを漕いで自転車に乗っていました。不安定な走行のためよく転倒したようです）で上を目指す遊びもしていました。よく転んで全身を痛めていました。

このすり鉢訓練について他の地域の人たちに聞いても、同じようなすり鉢はなかったと言っています。しかし、武石だけで行われていたはずはない。他の場所にもあるはずです。



宮原文男さんのお話から再現した
「すり鉢」のイメージ図

Q 当時は目的を知っていましたか？

当時はその目的を何となくだが大人から聞いていました。みんな戦争に行くものだったからこの遊びながらの訓練をみんなやっていました。

Q どのくらいの頻度で遊んでいましたか？

当時はほとんど毎日遊んでいたが、今の子どもたちのように放課後にすぐ遊んでいたわけではありません。当時、学校が終わるとすぐに、女子は子守りに、男子は家の手伝いをさせられていました。すべてが労働力だったので。女子には弟や妹がいなくても近所の子どもたちの世話をしていました。親の仕事が終わり、家に帰ってきたところからやっと

子どもたちの遊びが始まりました。

日が沈み、暗くなったところに近所の人間だけですり鉢を走り回り遊んでいました。

「当時の遊びはこれくらいしかなかったんです。」

Q すり鉢の訓練は実際にどうでしたか？

実際にすり鉢を走り回り、上まで登り切れることができたのは数多く子どもがいるにも関わらず、たったの2人だけでした。近所の子どもたちの中でも、特にけんかも強く、根性がある先輩が登りきることに成功していました。自分自身は登りきることはできず、繰り返し回っていたせいで、目が回り3分以上もまともに動けない状態でした。

Q 現在、すり鉢はどうなっていますか？

終戦が伝えられた次の日には、跡形もなくこのすり鉢がなくなっていました。詳しい理由は分からないが、後から大人に聞いた話だと、終戦後、銃や刀剣類はGHQにより回収の対象でした。それを防ぐためにもこのすり鉢の中に銃や刀剣類を隠したのではないのでしょうか。大人からは「すり鉢のあった場所の近くにこどもは来ちゃダメ！何か聞かれて



武石小学校校庭にて
宮原さんより、すり鉢の説明を伺いました

も絶対に黙っている」と念を押されました。

Q 私たちに伝えたいことは何かありますか？

今のウクライナでの戦争からも戦争という存在を常に身近に感じています。戦争は反対です。だからこそ、あなたたちのような若い世代に、この戦争の事実を語り継いでほしいです。戦争や政治に興味を持ち、受けた恩は返すという感謝の気持ちを忘れずに、アメリカなどの遠い大きな国だけでなく、近くの中国などの隣国と仲良くできるような国づくりをしてほしいと思います。

Q 召集について覚えていますか？

自分たちの6つ上まで召集をされました。講堂に集められ、高等2年が今でいう中学2年生が召集されていました。

講堂で召集が発表され、校長が白手袋をはめて、教育勅語や天皇陛下の言葉を聞きました。天皇陛下の言葉を聞いている最中は常に頭を下げていたことが記憶に残っています。

千曲市の屋代小学校にもこのようなすり鉢状の穴があったようです。戦後は石炭置き場、ごみ置き場として埋められることなく、使い方を変えて残っていたのではないかと思います。



私からの返信



今回、お聴きした「武石のすり鉢」についてのお話は非常に興味深いものでした。

少年飛行兵の育成の一環として、遊びながら平衡感覚や体力を養ったと聞き、小学生や中学生でさえも兵隊として戦争に駆り出されていたのだと改めて実感することになりました。

若い私たちに伝えたいこととして挙げていらした「戦争と政治に興味を持ってほしい」という言葉がとても印象に残りました。戦争体験を全くしていない私たちから遠い存在に聞こえる戦争も、ウクライナなどでは今でも起こっています。この事実を他人事にせずに、身近に感じることで戦争に対する意識を無くしてはいけないのだと感じました。政治に関しても同様に、未来の日本をつくり上げる私たちが興味を持つことでよりよい国づくりが可能になると思います。さまざまな面において、私たち若い世代が考えていくべきことが多くあるのだと感じました。

(文責 3年 岡田 輝)

戦死した戦友の小指をご遺族のもとへ



基本データ

- 荒川キヨさん（91 歳）
住所／上田市八木沢在住
※新潟県出身。戦時中も新潟で過ごしました。
- 聴き取り日／ 2022 年 8 月 26 日
- キーワード／ガダルカナル・戦友の死

Q 戦地から帰還されたお父さんのことをお聴かせください。

強く記憶に残っているのは、父荒川^{もりかつ}盛活のことです。父は、太平洋戦争も末のころ、国から召集がかかり仙台へ向かいました。父は、職業軍人ではなく、持病も抱えていました。



荒川盛活さんとその奥さん

昭和 16 年に召集を命じる赤紙が届きました。畑作業をしていた父は、その知らせをキヨさんから聞くと静かに「わかった」と答えました。

Q 出征の時の様子はいかがでしたか？

戦地に赴く際、父への見送りは行われませんでした。このころ日本にはスパイが多く潜み、それを警戒して軍服を着ることさえ禁じられていました。そのため出征する日、父は、町の役場まで一人で向かいました。家族にさえ詳細は知らされませんでした。

家族はなんとかして父を見送りたいと考え、父を乗せた電車が通過すると思われる駅で待ち伏せを決行しました。見送りに来たことが伝わればと思い、名字の書かれた弓張り提灯を携えて新潟県上越市にある「高田駅」へ向かいました。

しかし、父を乗せた電車は高田駅を通過することはなかったのです。

父は、仙台に向かった後、満州へ向かいました。度々満州の中心地から手紙が届き、現地の様子がわかりました。

Q 戦地では、大変な日々を送られたのでしょうか。

父は、満州に向かった後、ガダルカナル島へと赴くことになりました。しかし上陸直前で兵隊を乗せた船が爆撃に遭い、彼らは海上で散り散りになってしまいます。父は、戦友と共にガダルカナル島へと泳ぎついたそうです。

命からがらガダルカナル島へとたどり着いた父と戦友は寸暇も油断のならないサバイバルを強いられることになったようです。島の周辺には敵の船や飛行機が行き交い、日本軍の輸送船は次々に爆撃されていきます。水すら満足に得られず餓死する者が続出し、さらにマラリアが流行し病死する人も多くいました。アメリカ軍にいつ攻撃されるかも知れないという恐怖、飢えと渇き、目に見えない感染症。戦友は続々と倒れ、あたりには蹴飛ばすほど死体が転がっていたといいます。

しかし、父は、この数年後日本に帰還することが叶いました。

Q 日本へ生還された後の生活をお話してください。

家族の元へ姿を見せた父は別人のように痩せていました。既に軍服は身につけておらず、白衣にも見える患者服を着ていました。当時、戦地から帰った軍人は沢山の土産物をもって帰宅したといいますが、父のリュックサックには何も入っていませんでした。

父は、ガダルカナル島から脱出して島から島へと泳いで移動。ビルマ、インドを経て日本に帰ってきたと私たちに話してくれました。帰国したのは終戦から二年後でしたが、そのまま帰宅せず病院で療養していました。

父が、ガダルカナル島から持ち帰ったものがありました。それはガダルカナル島で亡く

なった戦友達の小指 16 本です。第一関節から切り取られ、白骨化した状態で缶の中に入れていました。骨にはすべて名前が刻まれており、缶詰で焼いて持ってきたと言います。戦死した戦友を、すべて遺族の元に届けようと考えていました。この言葉通り二年かけて盛活さんは遺族の元へすべての遺骨を届けました。訪問先で骨を受け取った遺族は泣いて喜び、深く感謝したといいます。

父は、その後、戦争の後遺症として震えを持っており、ひどいときは子供達が布団の上から押さえつけても止まりませんでした。

Q キヨさんご自身の戦争の記憶はございますか？

このころ女性は学校には行かず、工場での作業を命じられていました。中学生だった私は、新潟の有沢工場と呼ばれる作業所に住み込みで働いていました。そこではゲートルや軍手が作られ糸を機械に通す仕事をしていたそうです。

Q 工場で印象的なことはありましたか？

工場で働くのは中学生程度の少女が主でした。共同の寝室からは誰かの泣き声が毎夜聞こえていて、誰かが泣き始めると皆が一斉に泣いてしまったそうです。

工場で暮らすある日、少女の叫び声が聞こえた朝がありました。駆けつけてみるとそこには同い年の女の子が二人いました。一人はベッドにうずくまり、もう一人が何事か訴えています。宿舎をとりまとめていた女性の職員が駆けつけて事情を聞くと訴えていた女の子がうずくまった女の子を指さして再び叫びました。

「この子が寝しょんべんした！」

その言葉を聞いた瞬間、女性職員の顔が青

ざめました。それはお寝しょなどではなく、少女に訪れた初めての月経でした。中学二年になるまで工場で働くほとんどの少女が生理に対する知識も経験も無かったんです。本来小学6年生程度で起こる生理が、栄養不足によってほとんどの学生に訪れていなかったんです。

Q 私たち若者たちに伝えたいことをお話しください。

戦争はするべきではありません。戦争をする度胸があれば何だって語り合える。もっと対話すべきだと思います。



私からの返信



聴き取り内容を文字に起こしながら、荒川キヨさんの聴き取りは印象に残るエピソードが数多くありました。盛活さんを見送る際の出来事から始まって、ガダルカナル島での生活や小指を帰すための旅、キヨさんが働いていた工場での出来事など…太平洋戦争を象徴するマクロな出来事から、盛活さんやキヨさんの身におこった個人的な体験に至るまで、エピソードそのものにインパクトがありながらも戦争の異常さや悲惨さが伝わってくるお話ばかりでした。

しかし私が注目したいのが、ガダルカナル島から帰還した荒川盛活さんの「震え」についてです。この震えは日本へ帰ってきた盛活さんの身に起こり、戦争がきっかけで発症したものでした。震えている盛活さんの上に子供達がのってもおさまらないほど症状はひどく、療養施設に入院しても治らなかったといいます。戦争が終わった後でも戦時中体験した記憶は盛活さんの胸に深く刻まれ、苦しめていたのではないかと思います。

「戦争を取り扱った映画や劇でも、幕が下りたら終わったことになってしまう」と荒川キヨさんは仰っていました。戦争を直接に体験していない私たちは戦争にまつわる出来事を一過性のものとして捉えがちではないでしょうか。しかし戦争と現在は地続きであり、形の上では終結したとしても傷や遺恨を残し続けるのが「戦争」の性質だと思います。私は盛活さんの体の震えを通して、何年たっても戦争を見つめ続ける大切さを学んだように思います。

(文責 3年 高田一吹)

忘れられない 特攻隊出撃の最後のあいさつ



基本データ

- 柳沢四郎治さん（87 歳）
住所／上田市天神
- 聞き取り日／2022 年 10 月 14 日
- キーワード／旧上田飛行場

Q 終戦当時の生活の様子をお聞かせください。

1945 年（昭和 20 年）、当時私は 10 歳で国民学校の 4 年生でした。

兄弟は 8 人で、長男はニューギニア戦線の輸送船で攻撃を受け、次男は掃海艇そうかい艇の機雷事故で亡くなりました。

戦時中は、現在の三好町駅付近に家族で暮らしていました。父は自転車屋を営み、兄が競輪をやっていた関係もありまして新制中学 2 年から始めた競輪で 18 歳から 45 歳までプロ競輪選手として、東日本各地で行われるレースに参加しました。13 回優勝経験があります。

Q 終戦当時のことで強く印象に残っていることをお話しください。

旧上田飛行場の思い出が強く残っています。毎日、飛行場から飛び立つ訓練兵の練習機を見ていました。練習機は木製で、羽は布製だったように思います。

当時は、特攻兵を育てている（埼玉の熊谷飛行学校の分校である）ことを知らず、戦後になって大人から特攻兵の練習場であったこ



プロ競輪選手として活躍していたころの写真

とを知らされました。

当時の練習機の音をよく覚えており、今でもヘリコプターの音を聞くと、当時の情景を思い出すんです。終戦間際になると、訓練兵が小牧山に飛行機三～四機を引っ張って隠しに行ったところを目撃しました。その後、兵隊さんは疎開しました。

《敵艦載機の空襲》

昭和 19 年（1944 年）8 月のある日の朝、南の空から太陽の光を浴びてキラキラ光って飛行機 2 機が見えました。近所のおばさんた

ち3～4人立ち話をしていました。「日本も立派な飛行機を持っているな」しかし、その影が大きくなると米軍の飛行機だとわかりました。そのすぐ後には、一気に急降下し上田の街を機銃掃射で攻撃しました。急降下（地響き音）や銃撃の音はすごいものでした。

《戦時下の暮らし》

終戦間際は、本当に食べるものがありませんでした。食べるものがなく雑草を食べて飢えをしのいでいました。

小学校時代から、「男は戦争。兵隊になる。」と当たり前のように思っていたし、小さいながら死は怖いと思いませんでした。ある意味、当たり前であった。そのため、戦争で亡くなる兵士をかわいそうとは思わなかったです。自然にそのように思っていました。

当時、家にはラジオがあり若狭湾（福井）からの大本営発表を聞いていましたが、後で知った事実とは全く異なっており、日本の優勢な情報しか聞かされて来ませんでした。当時のニュースは大嘘うそでした。

《朝鮮人の人々》

当時、上田の周辺にも多くの朝鮮人が住んでいた。特に下之郷の近くに多く、酒屋を営み、焼酎を販売していた記憶があります。上田の人と仲良くやっていたと聞くことも多かったです。学校には朝鮮人の子どももいました。朝鮮の人々が、共同井戸どうもつの周りで、当時見たこともない何かの臍物ぞうもつを洗っていた記憶があり、当時はそれがもつ煮もつに使われていることは知りませんでした。その件から、朝鮮人は多くのことを知っているのだな、と感じていました。

※柳沢さんは、仁古田などの地下工場のことを知らず、そこで朝鮮人が労働していたことも

知らなかったそうです。

《特攻出撃最後の挨拶》

私の一番印象に残っていることは、旧上田飛行場の訓練兵が戦地へ向かう出撃する日の出来事です。旧上田飛行場を飛び立った後、最後に上田橋上空を通り太郎山から烏帽子を旋回して飛行機の主翼を三回左右に揺らして飛んでいきました。

それは、別れの挨拶でした。その時に見えた飛行兵の顔の面影は今でも切なく、とても記憶に残っています。

《柳沢さんから若い世代へのメッセージ》

当時は情報統制で、何も知らなかったけれど今思えば、日本は戦争に勝てるはずがありませんでした。日本は資源も情報も少なくアメリカには大きく遅れを取っていたと思います。

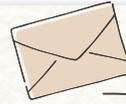
東南アジアに出兵した兵士や輸送船の乗務員はかわいそうでした。

日本は、朝鮮人に対してひどいことをしたと思うし、日本に連れてこられた朝鮮人も当時は馬鹿にされており、かわいそうだったと感じます。

ただ一ついえることは、戦争は二度と繰り返してはならない。最もしてはいけない行為であるということです。これほどに惨めなことはないと思う。相手の国にも、相手の国の生活があるからこそ、お互いにしてはならない。当時の日本を恨むわけではないけれども、本当に戦争をするべきでなかったと思う。

現在、ロシアによるウクライナ侵攻があるけれども日本人は過去に朝鮮に対しても同じようなことをしていた事実は忘れてはならない。もしかしたら、このような戦争や独裁政

権などは今後も終わらないのではないかと歴史をみると思ってしまいます。



私からの返信

元競輪選手という肩書をもつ柳沢さんのお話を聞いて、戦争へ行く特攻兵のお話は非常に心に残るものがありました。柳沢さんは、当時子どもたちの目に映っていた戦地へ飛び立つ「兵隊さん」というものは、かっこいい憧れの存在で、「いつか自分も戦地へ行って活躍するんだ。」と当然のように思っており、ご自身も小学生ながら戦死することへの疑問や恐怖を抱かなくなったそうです。しかしながら、「いざ戦地へ飛び立つ兵隊の気持ちはいかなるものであったのだろう。」「特攻兵は、どのような気持ちで機体を傾け、上田の地へ挨拶をしたのだろうか。」私はそのように感じました。「本当は家族や故郷を思い、死ぬことへの恐怖を押し殺していたのではないのだろうか。」そのようなことも考えました。真相は特攻兵本人しかわかりませんが、様々なことを考えてしまいました。また、同時に兵隊に憧れ、死を恐れることのない心理に小学生がなるような社会の雰囲気であったことにも衝撃が走りました。他にヒヤリングさせていただいた同年代の方も、多くは兵隊に憧れ、戦地へ向かうことを宿命であると当時感じていたそうです。いったいどのような教育によってそのようなになっていったのか、現代を生きる私にとっては受け入れがたいものであると感じてしまいました。

「柳沢さんは戦争や独裁政権みたいなものは、今後も終わらないのではないかと、歴史をみると思ってしまう」とおっしゃっていました。そのような社会をつくらないためにも、平和へ向けた取り組みとしてのこの活動の意義を再認識できるものとなりました。

(文責 4年 渡辺康彦)

切り倒されたポプラの木



基本データ

- 堀内富美子さん（86歳）
住所／上田市上田原在住
- 聴き取り日／2022年10月6日
- キーワード／旧上田飛行場と訓練

Q 当時の状況を教えてください。

戦争当時は、多くの疎開児童が来ていました。公民館に受け入れをしていたのですが、とても人数が多く、公民館で面倒みきれない子どもたちは近所のみんなで2～3人ずつ面倒を見ていました。

Q 戦争に負けたことをどのように知りましたか？

近所の友達たちと遊んでいたら、姉が来ました。姉は、「遊んでいる場合じゃないよ！戦争に負けたんだから」と言いました。親にラジオの前に座らされ、天皇の玉音放送を聞いたことを覚えています。

Q 戦時下の食事について教えてください。

当時私は、国民学校の5年生でした。佐久の望月に住んでいて、佐久の山では農業をしていました。このことから食べ物にはそこまで困っていませんでした。たくさんは食べることができませんでしたが、生活には困りませんでした。牛や馬を食べることはできませんでした。学校ではウサギ獲りというものをやっていました。山の中で学校のみんな

でウサギを囲んで、捕まえ、ウサギ汁にして食べたことを覚えています。他にも落穂ひろいというものも学校でやっていました。落穂ひろいというのは、米を収穫する際に落ちた穂をみんなで拾って食料にすることです。

Q 義父様が行かれたパプアニューギニアの様子について教えてください。

パプアニューギニアへは主人の父が行っていました。主人の父の名は堀内興四郎です。職業軍人でした。詳しい戦地の内容については聞くことができませんが「戦争ってなんで戦争するのか」今でもとても疑問に感じています。平成20年9月に慰霊のため主人とともにパプアニューギニアを訪れました。戦地の残骸ざんがいがそのままになっていたことがとても印象的です。あんな密林でどうやって生きていたのか。食べるものも寝るところもまともにないのに。とても苦しい状況だったと思います。

Q 戦時中のエピソードを教えてください。

主人の絵に残っていた飛行機に関するお話をしたいと思います。当時、上田には飛行場

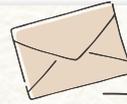
もあったため、毎日練習機が飛び交っていました。その練習機は町中を飛んでいました。ある日、川辺小のポプラの木を切り倒せという命令がきました。それは飛行機の旋回の邪魔になるからということでした。切り倒したポプラの木を使って、下駄を作りました。資料館（川辺泉田地域歴史資料館）に当時のものが残っているので見てください。

Q 私たち若い世代への伝言はありますか？

昔の戦争の記録を知ってほしいです。

戦争の話をしてても若い世代の人々はなかなか聞く耳を持ってくれません。だからこそ、戦争について興味を持って、戦争についてよく話して、戦争っていうものはこういうものだということをみんなに知ってほしい。

戦争は、物を失くして、人を殺して、もったいないことです。戦争を繰り返してはいけません。



私からの返信

私自身、戦争を体験したわけではありませんが、お話を聴く中で、鮮明な、そして衝撃的なエピソードの数々に驚きを隠すことはできませんでした。まるで自分自身が体験したかのように感じることもありました。

堀内さんからお話を聴くことを通して、失うものの大きさ、悲しさを改めて感じました。

若者の戦争に対する興味が薄れ、戦争が忘れ去られてしまっていることを私たちが感じ取り、後世に伝えていくことが大切です。

家族を失くし、仲間を失くす戦争について、その事実を伝えることを通して、戦争に対する意識をみんなに持ってほしいと思います。

私たちにできることは何か。戦争とは何か。これから戦争は今まで以上に忘れ去られてしまう出来事になっていくと思います。だからこそ、語り継いでいくことの大切さと戦争を知ることの大切さを感じることができました。

（文責 3年 岡田 輝）

お国のために出征し 尊い命を捧げた人々

● 田中兵次さん (96)

住所／上田市殿城在住

お寄せいただいたお手紙より

「……厳しくつらかった少年のころの生活体験を古い記憶を呼び起こしながら記述したものです。貴ゼミで生かしていただければ幸甚です。

また巡ってくる終戦の日。暗い記憶がよみがえる。日本の仕掛けた悲惨な戦争で幾十万の尊い命が亡くなられ、貴重な資源国土が失われました。かつて、早朝出征兵士を送り夕刻戦死され白木の箱での帰還を迎えたのも私の尋常小学校のころである。戦争は武力による国家間の闘争のこと。この77年前まで続いた戦争による私の身近の不幸はいまだに暗い影を落としています。義兄は、33歳でフィリピン戦で戦死。身ごもった長男を見ることもなく。寒村だった私の集落では十一人ほとんどの方が南方方面^{*1}での戦死という。この人たちに出征時、国防婦人会から千人針と一緒に『赤いふんどし』が送られました。これは、太平洋で輸送船が沈没して人喰いザメに襲われるのを防ぐためという。

戦後幾年か後に信じられない不幸が起きていました。かつて無言で帰還されたKさんは長男で既婚。未亡人となった妻に養子(婿)が迎えられていました。その後、突然日本政府の援護局からの知らせに啞然としました。シベリアに抑留されていたKさんが帰るといふ。叔父の家に身を寄せることとなりました。戦争がゆえの悲劇である。

わが国をとりまく環境は、厳しさを増しています。77年目を機に真の独立国として国防力を備えた国づくりに官民一体となり、実現の第一歩としたい。」

「……私達はお国のために滅私奉公、命を捧げる覚悟であります。どうか皆さんも銃後の守り^{*2}をしっかりとお願いします。では征って参ります。終わり。」田中青年敬礼も凛々しい。

弱冠19歳で戦争のために召された2人の出征兵士の門出の1コマです。国民服に戦闘帽、足に脚絆、肩には「出征 田中泉」「出征 高見沢功」のタスキがけという晴れの出で立ちです。

「……両君がお国のために出征されることは日本男子の本懐であり、まことにおめでたい極みであります。敵国撃滅のために頑張ってきてください。ではここで田中・高見沢両君の武運長久を祈ってバンザイを致します。」

※1：グアム、香港、フィリピン、インドネシア、タイ、ミャンマー、マレーシア、ブルネイ、パプアニューギニア、ソロモン諸島などが戦場になりました。
南方における、資源(石油など)地帯とそれらの輸送ルートを確保するため米英勢力を一掃する必要がありました。

※2：戦闘には直接参加せず、後方で支援(物資・資源・情報を供給)して、戦争の遂行と勝利を支援するという考え方。戦場の後方である銃後で働くこと。

昭和〇年〇月〇日の早朝である。(当時機密にかかわることは、この〇〇がよく使われた。) 殿城村^{※3} 役場助役(長男にあたる方は南方にて戦死された)の力強い音頭で日の丸を掲げての万歳である。見送りは、送られる兵士の家族をはじめ、友達、近隣の人々、そして在郷軍人^{ざいごうぐんじん}、国防婦人会、青年団^{しよじよかい}、処女会、区長、役場関係者と小学生など五十人余の人達で、火の見櫓前の広場が日の丸でうまりました。

「しっかりやってきてくれや…」

おとっさんの言葉は少ない。どんな気持ちで見送られたことやら。

「…ではご苦労でゴワスが川久保発七時十五分 皆で送ってオクナスッテ…軍楽隊を先頭に出発！」と役場の係の声。

青竹に高く掲げた「祝 出征兵士田中泉君」、「祝 出征兵士高見沢功君」の旗が朝風になびいていました。威勢よい行進ラップがなった。

「勝ってくるぞと勇ましく誓って国を出たからワ…」軍歌に合わせてドンドン、ドンドン、大勢の合唱が朝の静けさを破って田園に響きわたりました。

川久保駅^{※4}には五分遅れで「2両編成の電車が滑り込む。長村・本原^{※5}方面からの出征軍人や見送る人達で、すでに満員でした。電車の小窓も日の丸の旗で埋まっておりました。

「田中君、高見沢君 バンザイ」「バンザーイ」この時の白いエプロン姿の国防婦人会長の青木志うさん(長男正晴さんは20年1月フィリピン戦闘にて戦死された)から「千人針^{※6}の腹巻」が渡される。また、泉さんの弟昭三さんから、晴れの門出を祝った赤飯のムスビを手渡しました。

「バンザーイ バンザーイ 体に気をつけてナー」

「便りをくれよナー」

ちぎれるばかりの小旗、歓呼^{かんこ}の声に送られて2人は車中に消えていきました。

ピッピー ポー 見送りでごった返した電車が動き出します。ガタンゴトン

ガタンゴトン 踏切を渡って鉄橋に差し掛かる。

ポー ポー ひときわ大きな汽笛がふたつ鳴り響きます。

電車はトンネルの中に消えていきました。

駅のプラットホームでは、小さくなった電車にいつまでも小旗を振っておりました。

顔で笑って心で涙して見送る人々の心情は暗い。

お国のために一切の私情を捨てて戦場に向かう出で立ちの光景でありました。

時はさかのぼって昭和17年日本軍マニラ、スマトラ島占領など、日本中戦勝モードに湧いていました。しかし、昭和18年日本軍の戦況は一転しました。

かつての華々しい戦果の大本営発表は新聞から姿を消し、ガダルカナル島の撤退、アッツ島守備隊の玉砕^{ぎく}などの記事が目につくようになりました。

このころは、一億国民総動員令が布かれ、補充兵^{ほじゅう}として、赤紙(召集令状)によって出征される方が後を絶ちませんでした。

「敵国撃ちてし止まん!」「贅沢^{ぜいたく}は敵だ!」こんな張り紙が電柱に張られ、また、夜ともなると、電灯の灯が漏れないようにと厳しい燈火管制^{とうかかんせい}が布かれていました。

このような国民拳^あげての戦時体制の中で、昭和17年4月に米空軍の日本本土初空襲がありました。こ

※3：上田市東部に位置する小県郡の村。1958年上田市に編入されました。

※4：上田交通真田傍陽線の駅、1953年に殿城口駅に改称されました。真田傍陽線は1972年に廃止されました。

※5：いずれも上田交通真田傍陽線の駅。

※6：多くの女性が一枚の布に糸を縫い付けて結び目を作る祈念の手法。玉留めは「弾を止める」、返し縫いは「無事に帰る」の意味が込められていました。お守り。

のころを機に「赤紙」により出征される兵士は、かつてのような華やかさではなく、軍事機密にかかわることとして夜、ひっそりと忍びの出征に変わっていきました。この中の一人に田中一郎さん（先に出征した田中泉さんの兄）が含まれておりました。父親の明治さん、弟や妹たち、それに田中通矢沢区長などごくわずかな見送りで、川久保駅に向かうその足取りは重かった。

「食い物気をつけろヨナー」と父親明治さんの慈愛^{じあい}のことば。

「家のことは心配シネーデナー」と弟照三さん。

夜の川久保駅には赤坂^{※7}からの見送りの人達が、すでに電車を待っていました。赤ん坊を背負った若い母親が、軍服姿の夫の見送りであった。2人の目にはキラリと光るものがありました。

ポー

夜の電車の汽笛は、どこか物悲しい。暗闇のなかに消えていく電車に田中弟妹はいつまでも小さな手を振っていました。

これが兄、一郎と今生の別れになろうとは…

昭和19年米軍沖縄空襲など日本軍の敗色濃く、一方衣料品の切符制、味噌醤油^{みそしょうゆ}の配給統制^{きつぷせい}が行われました。また、軍需品、とくに戦車鉄砲などの材料不足を補うために、家庭内の鉄ビン、火鉢から筆筒^{たんす}の把手^てまで金属類の供出回収^{きゅうしゅう}が行われ、協力しない者は非国民扱いをされた時代でした。

銃後の守りにつく農村では、年寄り、女子は食糧の増産に励み、ひたすら戦場に征った肉親や友の武運の長久を念じていたのでした。

昭和19年秋のこと、殿城村役場に幾人かの戦死の悲報が入りました。

その中に「陸軍上等兵 田中一郎南方にて戦死」と、その筋からの通知でした。

悲報から幾月後、遺族や村民は戦死された英霊を川久保駅に迎えました。

変わり果てた白木の箱のすがたでありました。遺族に白いタスキで支えられての帰還^{きかん}はあまりにも痛々しい光景でした。

その後、お国のために名誉の戦死をされた方の合同慰霊祭が村葬として豊殿小学校校庭で、しめやかに行われたのでした。

昭和20年8月、日本はポツダム宣言^{じゅだく}の受諾によって第二次世界大戦は終結しました。

この矢沢では、大東亜戦争によって尊い命を落とされた方々は11名でありました。

ここに区民の皆様とともに、心からご冥福をお祈りしたいと思います。

※7：豊殿地区の赤坂

振り向けば七十六年 — 靖国の母と生還者の妻 —

長野大学山浦教授による語り部募集に応じて、山本一清さん（昭和24年生まれ、現在大阪在住）よりお母様の洋子さんによる手記「母の手記 振り向けば76年—靖国の母と生還者の妻—」をお寄せいただきました。

合わせて、手書き手記のテキストデータ（Wordファイル、一清さんによる加筆あり）と当時の写真や資料をご提供いただきました。

今回ご提供いただいた手記を全編掲載することは叶いませんでしたが、山本一清さんに許可をいただきまして、プロジェクトで内容を再編集し、洋子さんの手記を一部抜粋して引用させていただく形で掲載させていただきました。

本来ならば、手記を全編掲載させていただければよかったのですが、紙面の関係と、本事業の取り組みが太平洋戦争時代の人々の日常生活に焦点を当てるものであるため、今回は終戦までの手記について本記録集に掲載させていただいております。

洋子さんの文章は暗い時代のことを書き記しているはずなのに、淡々と時に軽快でユーモアのある語り口は読んでいて惹き込まれます。

いずれかの時期に、全編が公開される機会が来ることを心から願います。

また、本事業にご協力いただきましたすべての皆様にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

（编者）

昭和18年（1943年）洋子さん17歳のころ、上田市役所の2階で発足したばかりの国民健康保険組合制度の規約文^{※1}（和文）をタイプする日々を送っていました。

昭和18年は、昭和16年（1941年）に始まった太平洋戦争開戦後の東の間の勝利から一転して敗戦へ向かう戦局の転換期に当たります。

上田の街中を日常的に軍用トラックが往来し、日々伝えられる戦況の悪化、学生を含む若い青年たちにさえいつ召集令状が来るか分からない、そんな時代でした。

暗い戦争の時代に、洋子さんに運命的な出会いが訪れるのでした。

以下洋子さんの手記より

特別な二人の軍人さんと出会ったことで、私の人生が蘇生したと思うのです。暗い戦前戦中でしたから。

※1：洋子さんの手記から、昭和13年（1938年）7月に施行された国民健康保険の上田地域への普及が昭和18年ごろだったことが伺えます。

◆「17歳で始まって19歳でサヨナラ」

洋子さんはタイピスト^{※2}として市役所で多忙な日々を送りながら、農繁期の勤労奉仕隊に従事していました。勤労奉仕隊は、農村における労働力の不足を補うため、都市の町内会や各職場で4、5人ずつ編成されていました。

洋子さんが日舞を習っていたことから勤労奉仕隊から急ごしらえの慰問隊ができあがり、当時の上田飛行場（現在の^{上田千曲高等学校}は飛行場の敷地の一部にあたる）と群馬県の鹿沢高原を往来している設営隊部隊の駐屯地に洋子さんたちは慰問へ行くことになったのです。

以下洋子さんの手記より

温泉旅館の百帖敷きの広間の舞台では松竹歌劇団と芸妓組合の舞踊と歌があり、私たちは軍歌の踊りと寸劇の、素人の数あわせの様なものでした。

慰問の終わりに、部隊長から洋子さんたち5人へ慰労会の招待があり、ごちそうに預かったそうです。慰労会には、部隊長付きだった士官と大尉も出席されたそうです。

以下洋子さんの手記より

夜、お風呂の中で（私と一緒に慰労会に参加した）女性達が若い幹部候補生の士官さんのファンになってしまって、わいわいおしゃべりして居りました。お風呂から上がると、廊下に直立していらっしやるので、恐縮してしまいました。寝室まで誘導してくださって、翌日は軍用トラックで勤労奉仕隊と合流する農村地まで士官さんと兵隊さんが送って下さって、記念写真まで写しました。

その後、慰問が縁で知り合った部隊の方々から洋子さんのもとに5通ぐらいの手紙が届いたそうです。その中に毛筆で宛名書きされた角封筒がありました。士官さんからのもので、松竹歌劇団が歌っていた新

しい軍歌の音符付き歌詞（歌詞付き譜面のことかと思われる）と短い手紙が添えられていました。

勤労奉仕隊の中で一番年下の洋子さん宛に手紙が来たことで、年上のお姉さん方からは「何故、年少の貴女に」と言われたそうです。手紙はしばらく回覧をしていましたが、後日自分宛だけに来ていることに気づいた洋子さんは、みんなには内緒で手紙のやりとりをするようになりました。

士官さんからの何回目かの手紙に日記の切れ端が入っていて、慶応病院に入院していた妹さんが亡くなり、斎場を後にすると



慰問先の部隊の人達と

※2：手書きの原稿をタイプライターで清書する仕事が、タイピストの主な仕事でした。熟練のタイピストはタイピングスキルだけでなく、原稿の校正はもちろん校閲まで行い、高度な教養が必要とされました。また、専門的な業務内容にも通じていました。

き「紫の煙が立ち上っていた」と書かれた一文に彼の心の一部を垣間見た思いで、しばらく返事を考えあぐねていたそうです。

それからほどなくして、洋子さんの働く事務所に士官さんが訪ねてきました。

以下洋子さんの手記より

事務所の前の廊下に靴の音がコツコツと響き、ガラス戸の上方に軍帽が見え、行きつ戻りつの挙げ句、ノックがして、彼の士官さんが将校姿になって現れたのです。会議室に案内して皆さんに連絡しましたら、歓声を上げて会議室に集まってきました。もちろんピカピカの「肩章」「襟章」。疑うかた（紛う方）なき少尉殿です。軍服を着ると男性は又一段と凛々しく見えるものです。女性達は見つめたり（見惚れたり）溜息をついたり、彼の人が扇子を取り出し扇ぎ始めると「いい匂い」「ああ、香水の匂い」（とはしゃぐ）純情な女達でした。私もその扇子をお借りしていい香りを嗅いだのでした。皆ニマニマと笑い合ったのでした。時間の経つのを忘れて居りました。でも、会うは別れの始まりで、この方々がまもなく当地を離れるのを、皆知っておりましたので、「ようこそわざわざ面会にいらしてください」と、心から喜び合ったのでした。

昭和19年（1944年）8月、夏のある夜、洋子さんが湯上りの髪を梳いていると、戸口に人の訪れる心配がしました。戸を開けてみると、今は少尉となった士官その人が、朱と金の襷たすきを肩から掛け、白手袋で拳手の礼をして直立していたのでした。

「週番を買って出てきました。明朝出発です。これを…」

少尉はポケットから白い包みを洋子さんに渡すと、何も言わずに立ち去ろうとしました。後で確認すると洋子さんが渡されたのは、彼が学徒出陣の私物に大切に持ってきた大学時代に獲得した優勝メダルでした。

洋子さんは急いで部屋からハンカチを取ってくると少尉に渡しました。その時、何の言葉も口から出なかったそうです。

ハンカチには当時の流行歌「影を慕いて」（古賀政男^{※3} 作詞）の一節を刺しかけていたので、これから戦地に赴く少尉にふさわしいものだったろうかと悔いが残ったそうです。

以下洋子さんの手記より

突然の出来事に、こんな「しずがや」（賤が家）をいつ調べたのか、もう、その夜は混乱して、渡された品が「畏れ多い」私ごときのお預かりする様な品ではない。—中略—

夜に、遠い上田橋を渡って、飛行場の宿舎に帰って行かれ、何の励ましもお別れの言葉も出来ない（ままで）歯痒い一瞬の出来事に、翌日から、もう上田を出発してしまう…心残りの、おろおろするばかりの夜となり、その人が、私の心を占拠してしまって、その思いが、日に日に募っていき爆発しそうになってしまったのです。

同年夏の終わりには、本土決戦に備えて、女性や子供たちは山に逃げ込まなければいつ敵が上陸してく

※3：古賀政男（1904年（明治37年）11月18日－1978年（昭和53年）7月25日）は、昭和を代表する作曲家として数々のヒット曲を世に送り出しました。戦中戦後と日本人の心を支えた作曲家といわれています。

るか分からない、落下傘部隊が上田のような田舎町にも潜入してくるというようなことが盛んにいわれるようになりました。

そんな情勢不安の折、洋子さんのお父様の友人から、「旧家の跡取りが学生の息子しか残っていない、このままでは子孫が絶えてしまう。仮祝言で良いから結婚させよう」との申し出があったそうです。

「母子は絶対、小牧山の横穴で護る。山も土地もある、食べるのに困らせない」など相手方による再々の説得について洋子さんのお母様が申し出を承諾してしまったそうです。

以下洋子さんの手記より

本土決戦、南方戦線の悲惨さを伝えられ、町中の人々が四方へ散っていき、ゴーストタウンのような人気がない街は不気味なものでした。とうとう来るべき時が来た、そんな自分に決心がつき、両親の説得に応じることになりました。

またたく間に仮祝言への話しが進む中、洋子さんは少尉からの手紙を受け取りました。

『洋ちゃん、元気ですか。小生も元気で軍務に服して居ります。空が青く、白い雲が浮かんでおります。では、お元気で』

見覚えのある封書を開くと、便箋にはこれだけの文面が淡々と並んでしました。

洋ちゃん、いかにも親しげな呼び方はこれが初めてのことでした。寂しくて、打ちひしがれているであろう自分のことを元気づけるための最後の励ましなのか、洋子さんは今自分の身に降りかかっている一連の出来事について、少尉に知らせるべきか、何も告げず仮祝言に臨むべきか千々に乱れる思いで悩みました。

以下洋子さんの手記より

夕暮れの千曲川に架かる上田橋の下の土手に腰掛けて、キラキラ輝く様に流れる水面に石をバンッパシッと投げ込みながら味気のない空しさに打ちひしがれておりました。

—中略—

まだ手紙が届くかも知れない。やっぱり大切な方に、次便の現状を報告すべきではあるまいか。これは自分の未練を打ち切りたい一大決心の勇気でした。夜書いた手紙こそ大和撫子そのものだったのです。

「私は今度結婚します。『産めよ増やせよ』の国策に従い、銃後を護ります。貴方様も後顧の憂いなく最前線でご活躍ください。ご武運をお祈りいたします。」

洋子さんはそうしたためた手紙をその日の夜に投函したそうです。

『女々しい内容は検閲を受け、皆の前で読まされ、男子の恥だ』当時軍隊では、そのようなことがあると聞いていた洋子さんは、敢えて女々しさを表わさない手紙を送ったのです。

その後、洋子さんのお父様の友人があたふたと駆け込んで来て「大変だ。息子が（学校を卒業して）帰らないうちに赤紙が来た。1週間後です」

すると洋子さんのお母様が「そんな慌ただしいのに娘はやれない」そう言って、洋子さんの縁談の話は破談になったそうです。

望まない縁談から逃れられたことは洋子さんにとって安堵する一方で、お相手の召集によるものという理由を考えると、心中複雑であったことと想像できます。

この顛末が終わりを告げたところへ、少尉から最後の手紙がきました。

以下洋子さんの手記より

『いよいよ、決戦場へ出発です。お元気で』

筆の乱れた走り書きでした。出発前の慌ただしさか、手紙を見ての筆の乱れか、とにかく誠実な方です。ありがとうございました、これですべて終わったのですから。

外見は終わりましたが、自虐の心の旅は果てしなく続くのでした。そして六通の封書とメダルが宝石より大切に文箱に収められ、『十七歳で始まって』『十八歳でサヨナラ』の過去に封印したのです。

◆ 「女子挺身隊」

昭和19年秋に洋子さんは、自分の大切なものを守りたい、そのためには自ら行動をおこさなければならぬという思いから、周囲の反対を押し切る形で女子挺身隊に志願したのです。

以下洋子さんの手記より

上田の街に衝撃が走ったのは、前線に向かった部隊（の船）が撃沈され、輸送船^{※4}もろとも沈んだと言う情報でした。それはショックで、信じられないまま、私は砂を噛むような日常だったので、家庭にいる夫人達に呼びかける女子挺身隊員という隊員募集に応募してしまったのです。お世話になった主治医の理事長先生や上司、両親の猛反対を押し切って、この上は女子といえども前線で弾運びでも何でもやらねば、消極すぎたので、大切なものを失ってしまったと一途に思い込んでいたのです。

昭和19年の秋、上田市役所の講堂で女子挺身隊が結成され、それぞれ小隊に分けられました。洋子さんは50人ほどの分隊に分けられ、紙革工場へ配置されたそうです。

工場では、蒟蒻のりを貼り合わせた和紙の風船爆弾を作りました。

以下洋子さんの手記より

紙革工場というコンニャクのりを貼り合わせた和紙の風船爆弾で、敵地に飛ばす発想も（変ですが）命中率ゼロという代物でした。誰が考えたものか、隊員達と、「上質和紙と食料品のコンニャクを大量に使ってもったいない」と話し合ったものです。

洋子さんの手記によると、この時代の若い女性たちの外出着は、主にもんぺ、和洋服専用の標準服に防災頭巾を肩から斜めに背負い、布製の鞆を掛けていました。

鞆の中には、いつ防空壕に避難することになっても困らないように、煎った米と煎った大豆、小さな水筒、応急用の包帯、脱脂綿、ちり紙、手ぬぐい、着替え用の衣服を入れて持ち歩いていました。

年ごろだった洋子さんは、このもんぺ姿が嫌いだったそうです。

戦時中、銘仙^{※5}の和服姿でお花のお稽古に通っていたとき、突然ある住宅の庭から「非国民！」の叫び声とともに石を投げられたことがありました。以後、戦争が終わるまで恐ろしくて洋子さんは和服を着て出かけることができなくなったそうです。

その後、戦況の悪化による品不足ため紙革工場の操業が中止されたことにより、洋子さんは通信の軍需工場に転職することになりました。

※4：手記には船名などの情報は記されていませんが、昭和19年6月29日日本郵船が運航していた貨物船富山丸が沖縄への増援部隊を輸送中に撃沈され3,500人以上の犠牲者が、また同年8月22日学童疎開船の対馬丸が撃沈され1,400人以上の犠牲者が出ました。

※5：当時は気軽な普段着として親しまれていました。鮮やかな色味や大胆な模様柄の生地が流行し、お茶やお花のお稽古に行くときの装いとして好まれました。戦争中、色物や柄物は華美とされました。

それぞれの職域が異なるため、適正試験を受けることになりました。洋子さんは一人だけ満点だったそうです。適正試験の後に面接がありました。

以下洋子さんの手記より

テストの後は面接でした。事務部長の肩書きの有る物静かな紳士でした。趣味の読書の話で「最近何を读みましたか？」

兄の蔵書の中からドストエフスキー、ヘミングウェイなど、何日もかかって読みふけた等（答えました）。部長さんは学生時代に読まれたのでしょうか、ついつい長引いて（しまって）、青白きインテリという感じの都会育ちの方のようで、軍需工場の面接と言うことを忘れ、眩しいくらい上品な紳士と共通のお話が出来て、味気ない東部の片田舎に疎開暮らしの孤独な身には、熱い血が燃えた一瞬でした。夜はがらんとした親戚の農家の二階で琴を、音を立てないように爪弾いていたのです。『まぼろしの影を慕いて…（影を慕いて：古賀政男作詞作曲）』まさに空蟬の心境でしたから。

昭和20年（1945年）2月、女子挺身隊員の多くが油まみれの現場へ配置されるなか、洋子さんは試験課長の隣で記録を取る事務職に就いていました。そのことが女子挺身隊の仲間たちから妬みを買うことになるのです。

しばらくして洋子さんと同じ職場に一人の女性事務員が入ってきました。ある日、彼女から読んでくださいと差し出されたノートを見ると『貴女はいったい何様なのですか？本社採用の私の上席に座り、特別な資格でもあるというのですか。お答えください。』達筆な文字で書かれた質問状でした。

課長に相談して洋子さんは取り合わないことで対処しましたが、気まずい思いだったそうです。さらには、その女性事務員の兄にあたる人物が配給係だったため『貴女は勤労隊ではない故、物資の支給はストップ』と言われ配給を絶たれてしまったのでした。当時の軍需工場は物資が豊富で、洋子さんのお母様は缶詰や穀類の配給を心待ちにしていたそうです。

そんなある日、非常召集がかかり大講堂に従業員全員が集められました。男女学徒、中年の徴用男女、女子挺身隊、洋子さんも初めて見る多勢の人々でした。

「国家非常の時、一刻も大切な時期に座り込みとは何事か！それぞれが適材適所に効率よく配置するためのテストを受けた結果に異論があるならば、多数を頼まずに、この場で発言しなさい。先導者は誰か！」工場長が大声で叱責した先には女子挺身隊がいました。

洋子さんが現場に出ないことを不平等に思った女子挺身隊の隊員たちが座り込みをしていたのです。

以下洋子さんの手記より

何も知らずにいたのでショックでした。私自身に、現場に入るように説得した方が早道では無いか。座り込みなど大仰な。仲間の誰が先導したのだろう。隊長は年長者だし、副隊長は姉と女学校の同級生で、人柄のよい人だし、元気なあ仲間かしら。

洋子さんへの嫌がらせともいえる行為は続きましたが、そんな洋子さんを励ましてくれたのが、事業部長（面接官だった事務部長と同一人物と思われる）でした。また工場長の秘書と事業部長の秘書だった女性たちとの交流に慰められました。

以下、洋子さんの手記より

せめて心とんだのは、工場長の秘書の、美しく聡明な女性と、事業部長の秘書のかわいいお嬢様と三人で工場裏の土手で日向ぼっこをしながら、東京育ちの二人の楽しかった都会の思い出話など。特に事業部長の秘書のチー子さんが、ブルジョアの通う幼稚園から大学までの一貫校高校で、疎開してきていたの

で、乗馬やヨット、英語劇と、学園生活の華やかさを恋しがっていました。

◆ 17歳の学徒出陣

昭和20年（1945年）春先、いよいよ戦いの庭（戦場のこと）に17歳の少年たちが召集されるようになり、毎日広場^{※6}では壮行会が行われるのでした。

以下、洋子さんの手記より

ある日一人で、（広場の）土手で休んでいると横に女子学生が飛びついてきたのです。

「お姉さん、とうとう彼にも来てしまったの。今日の壮行会がそうなんです。」

「あら、そうなの。貴女の彼だったの」

「皆行ってしまう、もう」

ワッと泣き崩れて、私の膝の上で身をよじらせ泣くか細いうなじの少女が、特別親しいわけでもない（のに）『お姉さん』と言って、甘えてきます。

「私、彼と接吻したの…」

彼とのことを言ってしまうたいのでしょうか。

「そう。よい思い出が出来て良かったわね。これから長い辛い日々を送らなければならないのよ。強くなるのよ。お姉さんなんか、青春真っ盛りなのに独りぼっち。辛くて泣きたいくらいだけど、泣いていてられないのよ。」

昼休み（が終わる）ぎりぎりまで甘える少女の温もりを感じていたのです。ストレートな若々しさが羨ましかった。これから、この子達の将来はどうなっていくのだろう…

少年たちが次々と出兵して行くなか、洋子さん^{※7}を慕っていたある学徒が召集されることになりました。工場長の秘書は、みんなから慕われている優しい女性だったので、彼や出兵していく学徒たちを何人か集めて、菅平高原でお別れ会を開催することになったそうです。

洋子さんたちが高原で散策をしているとその少年から写真が欲しいと言われたので、乞われるまま洋子さんはご自分のスナップ写真をお渡ししたそうです。

別の少年たちからもそれぞれにお願いされて、洋子さんは3人の少年に同じスナップ写真を渡したそうです。

洋子さんなりの思いやりの心から写真を渡したものの、複数の少年に同じ写真を渡していたことが、ほどなくして少年たちの知るところになります。

以下、洋子さんの手記より

空蟬の身には、人を思いやる心さえ失っていたので、どうしたら良かったかさえ、見当がつかせませんでした。



洋子さんのスナップ写真
（18歳ごろと思われる）

※6：手記の中で『春先の土手に男子や女子の学生達が三々五々、集まって語り合いながら昼休みを過ごしておりました』との記載があることから通信工場内に広場があつと思われます。

※7：手記では「自分を慕っている」と書かれています。自分が秘書の女性のことを指すのか、洋子さんのことを指すのかどちらにも取れますが、「写真をください」と言われて洋子さんが写真を渡していることから、ここでは洋子さんとして記述しました。



のちに洋子さんの夫となる琢郎さんの写真

—中略—

「自分だけ持っていたと思っていたら、皆同じ写真を持っていた」と、怒りの表情で、又返され、私も無言で、彼らも無言で出征してゆきました。

お国に召されてゆく17、8歳の少年達へ19歳の私に、何が出来たと言うのでしょうか。

—中略—

皆それぞれの思いを抱きながら、戦の庭（戦場）に、またひとり、ふたりと召されて行きました。

◆終戦

真夏のある日、重大ニュースがあるというので洋子さんたちは広場に集められました。

太陽がジリジリ照りつける広場には、めっきり若者の姿が少なくなった従業員達が集められて、雑音の多いラジオから玉音放送を聞いたそうです。

玉音放送を聞いた人々の反応は様々でした。

喚き、泣き叫ぶ人、座り込み、頭を抱える者、空を見上げる者。

「何事が起きたんだ」

「戦争が終わったんだ！」

「負けたんだ！」

「本当なのか？本当に終わったの、戦争が！」

「明日からどうなるんだ」

「帰る家が無い。焼けちゃって…」

「働く場所はどうなるんだ」

「これでやっと兵役免除になる！」

「明日から大手を振って洋楽聴けるぞ！スキーに行ける！」

以下、洋子さんの手記より

一人家で聴いても何もわからなかったでしょうが、このような数々の広場の人々の嘆く中、敗戦という臨場感を肌で感じ取り、戦で死んだ人は一体何の為だったのか。

今軍人達は、兵隊達は、どこでどうしているのだろう。

本当にこのまま戦が終わるのだろうか…

信じられない。無念の涙が止めどもなく流れ、体の中から力が抜けていきあのと、私はどうしていたのか、全く覚えていないのです。

◆終戦後の洋子さん

終戦後、洋子さんは夫となる琢郎さんと知り合い結婚することになります。

その経緯もまた新たな物語の始まりでした。本稿の結びに、洋子さんが夫となる琢郎さんとの初めての出会いを記した文章を紹介させていただきます。それは、終戦前の昭和19年のある冬の日でした。少尉として、上田の教育飛行隊に配属された直後の琢郎さんと洋子さんは出会ったのでした。

以下、洋子さんの手記より

初めて夫となる人と出会ったのは、昭和19年冬の日。上田市の家近くの松尾町と海野町の交差点の角を颯爽と将校マントを風に靡かせ、長靴を踏みならして通り過ぎる軍人の軍帽の下から見える顔立ちがあまりにも、8月に別れを告げに見えた軍人さんに似通っているので、思わず棒立ちになって、しばらく見送っていたのです。

生き写しと言うけれど、「もしや兄弟なのでは？」そんな印象の強い人であったから、やがて再会した折には、運命的なものを感じ強いショック受けたのです。

いずれかの機会につづく

山本一清（やまもといつせい）さんより

この母の手記は、平成13年(2001年)に書かれたようで、当時父が入院を始めた時期だったと思われます。母は、父を看病しながらこの手記を書いたのではないかと思います。私の手元には父が亡くなった平成17年(2005年)以降手渡されたコピーがあり、そのままになっておりました。

なぜ、このような手記を書いたのか疑問に思って確認したら、原本は母の末の弟（大手広告代理店でプロデューサーをしていた）に言われて、何かの企画の参考になれば、ということで書いて渡したらしいことがわかりましたが、その叔父も8年前に鬼籍に入り、遺族に聞いてもわからないということで、原本の行方はわかりません。

手記の内容を入力する作業をしながら、地名や起こった出来事などをインターネットなどで確認すると、結構正確に覚えていたことに驚きます。旧仮名遣いですが、漢字や語句も豊富で、我が母ながら、記憶力と造詣の深さには感心します。

この手記を読んで、私は自分がいかに少ない偶然のもとに生まれたのか、ということに、改めて感慨を持ちました。考えてみれば、今生きているということは、父母が戦争中を生き抜いてきたからあるわけで、そのことの希少価値を思えば、大切に生きていくことに意義があるように思います。若い人達に自身の存在価値の重さを、改めて考えて頂ければいいと思います。

第2部

上田市内に残る戦争遺跡

本原小学校に保存された奉安殿^{ほうあん でん}

社会福祉学部4年 渡辺 康彦

戦争が激しくなっていくにつれて、学校教育も大きく変わっていきました。

ここでは、当時の学校教育を紐解くための一つである上田市に現存する戦争遺跡^{ひもと}の奉安殿^{ほうあん でん}について説明していきます。また太平洋戦時下(1941年～1945年8月)の日本では、どのような学校教育が行なわれてきたのか、学校教育は日本が戦争をしていく上でどのような役割を果たしたのかについても説明していきます。皆さんは戦時下での学校教育が、現在のものとどのように違うのか考えながら読んでみてください。

皆さんは、奉安殿^{ほうあん でん}とは何か聞いたことはあるでしょうか。おそらくほとんどの人が耳にしたことすらないと思います。奉安殿は、当時の学校教育について知るうえで重要な戦争遺跡の一つです。

奉安殿^{ほうあん でん}とは、「戦前の学校に必ず設置されていた施設^{てんのうこうごうりょうへい か}で、天皇皇后両陛下の写真(御真影)や教育勅語^{ちよくご あんち}を安置していた建造物」のことです。皆さんの小学校や中学校にも必ず置かれていたのです。奉安殿の建設は、1910年ごろから始まり、1935年以降、急速に活発化したそうです。ここで驚くのは、当時の国民学校において奉安殿^{ほうあん でん}は学校の最重要施設^{さいじゅうようしせつ}であり、登下校時や単に前を通る時でも、最敬礼(天皇陛下への最も丁寧な敬礼^{さいけいれい})をしなければならず、御真影^{ごしんえい}(※天皇皇后両陛下の写真)の取り扱いには最大の敬意と細心の注意が払われました。文献

資料によると奉安殿^{ほうあん でん}に御真影^{ごしんえい}を迎え入れる時には、村長や校長先生が県庁に取りに行き丁寧に迎え入れたと書かれていました。村の長が自ら受け取りに行くほど重要なものだったようです。

では、戦時下において奉安殿^{ほうあん でん}はどのような役割を果たしていたのでしょうか。大きく二つの役割があったと思われます。

一つ目は、「天皇皇后両陛下^{てんのうこうごうりょうへい か}の写真及び教育勅語^{きょういく}を安置^{ちよくご あんち}するため」です。学校での火災による焼失や紛失をなくすために、鉄筋コンクリートやレンガで作られた奉安殿^{ほうあん でん}に保管していたそうです。火災による焼失の危険から、校舎から離れた場所に置かれていました。また保管の責任は校長先生にあり、紛失があった場合には、重い処罰を受けたそうです。

二つ目の役割は、天皇皇后両陛下^{てんのうこうごうりょうへい か}の写真と言葉を保管する奉安殿^{ほうあん でん}を学校の最重要施設とすることで、子どもたちに天皇陛下が日本における最高位の存在であり、「日本国民は、天皇陛下^{こうこくか}のためという皇国化教育を進めるため」であると考えられます。

そのような重要な役割を果たした奉安殿^{ほうあん でん}ですが、なんと終戦後(1945年8月15日～)にそのほとんどは撤去^{てつきよ}(※取り去ること)されました。理由としては、戦後にGHQが学校教育の改革のため、「撤去」の指示を出したからです。しかしながら、奉安殿^{ほうあん でん}が上田市真田本原の本原小学校の近くの廣山寺^{もとほらもと}というお寺に残されて

いるのです。現在は、この地域の戦没者の英霊殿（※戦争で亡くなった人たちを弔うもの）として守られています。戦後に「撤去」の指示が出されましたが、移設や学校の敷地から離すことで撤去を逃れた奉安殿が、現在にも残っているのです。

ここからは、戦時下ではどのような学校教育が行われていたのか述べていきます。

戦争が激しくなるにつれて、学校教育への国家統制（※国が関与し、まとめること）も強くなり、政府は1941年に国民学校令を出し、従来の小学校は4月1日から、「国民学校」と名前が改められました。

国民学校の目的は、国民学校令第一条の「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」とされています。

『国民学校』は簡単に言えば、「天皇陛下のために身も心も尽くしなさい」という考えのもと、『皇国民（※国のためにはたらく国民）の基礎的錬成』を目指していました。つまり「日本が戦争に勝つために、国や天皇のために命をおしまない子どもたちを育てる」ことが国民学校の目的でした。

では、「国や天皇陛下のために身も心も尽くす人」を育てるために、具体的にはどのような学校生活や授業が行なわれていたのでしょうか。

毎朝、朝礼が行なわれ校長先生が奉安殿から教育勅語を取り出し、全校生徒の前で読み上げ、暗唱していました。また当時は、戦争に向け武術の訓練が行われました。木刀や竹やりを持ち、訓練をしていました。小学生ながら人の命を殺めるための訓練をしていたのです。

また、当時は学校行事や集団行動も重視されました。学校行事に加えて、勅語奉読式や四大節などの国で定められた行事が行われ、校長に



写真は、本原小学校に残る奉安殿（撮影：渡辺康彦）

よる奉読が行われました。何度も奉読（※敬意をもって読むこと）を行うことで、子どもたちの愛国心を育て、教育勅語を理解させることを目的としていました。

学校では、常に日本軍の勝利のニュースが伝えられ、子どもたちは「日本は神の国」と教えられました。これらの軍国教育によって、男子は飛行兵に憧れ、女子は戦争を陰で支える存在に憧れるようになりました。

当時の学校教育の具体的な内容については、第一部の「若者たちへの伝言」の戦争体験のなかにも、多く語られています。

現代を生きる私たちからすると、当時の学校教育は信じがたいものであったと思います。学校教育も戦争を軸に展開され、子どもたちの勉強よりも戦争へ向けた訓練や精神の鍛錬が優先されていました。いかに国民全員が国や天皇のために動いていたかを知ることができます。

奉安殿は当時の皇国化教育を象徴するものとして現在の私たちに語り継ごうとしているのです。

〈参考文献〉

○本原小学校百年誌 育英

○上田市 HP 「上田市の戦争遺跡」

<https://www.city.ueda.nagano.jp/soshiki/shogaku/3171.html>

旧上田飛行場

社会福祉学部3年 宮城 佑妃子

部活動に励む学生たちの元気な声が響く上田千曲高校。その旧正門跡の近くに、とある記念碑が建てられているのを皆さんはご存知ですか。その記念碑には「上田飛行場跡」と大きく書かれていて、細かな文字で飛行場が辿った歴史が刻まれています。上田飛行場とは、どのような飛行場だったのでしょうか。上田飛行場は、上田市の経済を支えるために造られました。1926年、繭糸価格が暴落した影響で、養蚕業を生活の支えとしていた上田市民の多くが貧しい生活に陥りました。1931年3月、この状況を変えようとした上田市は、国の補助を受けながら現在の上田千曲高校がある周辺の土地を開墾していきま

す。農業ができる土地を増やして市民の生活を守ろうとしたのです。しかしながら、この土地は痩せていて農業には向いていないことが開墾する中でわかってきました。そこで、当時必要とされることの多かった飛行場を造ることにしたのです。上田市は、東京都と新潟県を直線で結んだ中間の位置にあります。東京都と新潟県を行き来する飛行機の中継地点として、活躍が見込まれたのです。

飛行場は1931年の秋に完成しました。このとき東西600m、南北200mの大きさで、同年10月1日には飛行場開場式が開かれました。招待されたお客は1,000人以上、観客は10,000人以上おり、これまでには聞いた



写真は、山浦教授撮影。フィールドワークにて。

ことのないような盛り上がりを見せました。

その後も飛行機の離陸や着陸が安全にできるように改良したり、格納庫や車庫を建設したりと設備が整えられていきます。当時の上田市は飛行場を観光名所としても売り込もうと考えており、弁当の掛け紙や絵ハガキで飛行場をアピールしていました。しかし1933年、飛行場は陸軍に寄付されることになりました。

陸軍に寄付されたことで、上田飛行場は「陸軍上田飛行場」に名前を変えました。新聞社が持つ民間機の他に、パイロットを育成する飛行学校、パイロット部隊である飛行連隊、政府の飛行機が飛行場を利用するようになりました。1年間で200～300機が上田飛行場に降り立ち、本州中部を飛び交う飛行機に



上田飛行場祝賀会の様子

写真提供：ヤマンバの会の手塚正道さん。手塚さんを講師にお迎えして、太平洋戦争戦跡調査フィールドワークを行いました。

とって、とても重要な飛行場となっていました。上田市は山が多く、寒さが厳しい特徴があることから、パイロットの山岳地での飛行や耐寒を鍛える訓練を行う地としても高く評価されていました。

1937年になると、イタリアの国際連盟脱退や、日本軍による中国の南京占領といった出来事が起こり、世界全体で戦争への緊張感が増していきました。戦争に向けて上田飛行場はよりパイロットの訓練場として利用されるようになり、飛行学校の訓練場所として「所沢陸軍飛行学校上田分教場」「熊谷陸軍飛行学校上田分教場」と改名されました。このころ、飛行場をもっと広くするために周辺の農耕地が強制的に買い取られたり、飛行場近くの工場の煙突が飛行機の着陸に邪魔だからと切り落とされたりしました。戦争のために、国民の生活を犠牲とすることが当たり前になっていたのです。

戦争が続く中で日本は不利になっていきました。軍の上層部は、アメリカをはじめとする連合軍に日本が勝つためには、普通の攻撃方法では足りないと考えました。そして、兵

士が生きて戻ることを考えない、特攻と呼ばれる体当たり攻撃が編み出され、各地で行われるようになりました。1945年4月になると、上田飛行場も特攻攻撃の訓練基地として使われるようになります。そして、上田飛行場から10名が特攻隊として出撃し、全員が戦死しました。彼らはまだ20歳前後の若者でした。上田飛行場で特攻隊の教官を務めていた遊佐卯之助准尉は、このことに心を痛め、戦後ご家族と共に自決の道を選んでいきます。

〈参考文献〉

- ①上田市 (2019)『上田市の「戦争遺跡」』 上田市ホームページ (2022/12/1 参照)
<https://www.city.ueda.nagano.jp/soshiki/shogaku/3171.html>
- ②上田市誌編さん委員会 (2003)『蚕都上田の栄光』 上田市誌刊行会
- ③上田市誌編さん委員会 (2000)『上田市民のくらしと戦争』 上田市誌刊行会
- ④「上田飛行場跡」記念碑 碑文

長野県で初めて空襲を受けた上田市 ～上田空襲は3回あった～

社会福祉学部3年 篠原 隆雅

1. 初めての長野県への空襲と焼け残った櫨
1944年に入ると、日本にある大都市は毎日のように空襲を受けるようになりました。では、長野県で最初に空襲を受けたのはいつだったのでしょうか。

それは、1944年12月9日、午後7時45分ごろ、小県蚕業学校（現上田東高等学校）にアメリカ軍機が爆撃し、校舎が焼け落ちました。

日本における初めての空襲は、1942年4月18日に東京、横浜、名古屋などの大都市

に行われました。長野県への空襲は日本への初めての空襲から2年8ヶ月の年月が経っていました。長野県は、内陸に位置していたため、安全だと思われていました。そのため、空襲を知らせる監視塔は、丸子方面から侵入した飛行機に対して、アメリカ軍機であるとは思わず、空襲警報が遅れてしまいました。敵の飛行機と認識して警報を出したときには校舎はすでに燃えていたそうです。

このときの空襲によって、小県蚕業学校の校舎は燃えてしまいました。しかし、正門付近にあった櫨の大木は、現在でも同じ場所に残っています。この櫨は燃え上がる校舎の熱を受けながらも生き延び、「戦災ノ櫨」として現上田東高校に残っています（写真1）。力強く大地に根を伸ばし、枝を広げて凛々しい様子は、反戦平和を訴えているかのようです。

この空襲による直接の被害は、校舎のみでしたが、子どもたちの尊い命が失われたのでした。また、これからも空襲される可能性は十分にあったので、この出来事をきっかけにその時の備えとして、防空壕をつくっていきました。

なぜ小県蚕業学校を攻撃したのか、アメリカ側の記録には、この1944年に起こった空襲が書かれていないため、はっきりとしたことは分かりません。しかし、上田には上田飛行場という飛行兵を育成する軍事施設があっ



写真1 戦災記念ノ櫨

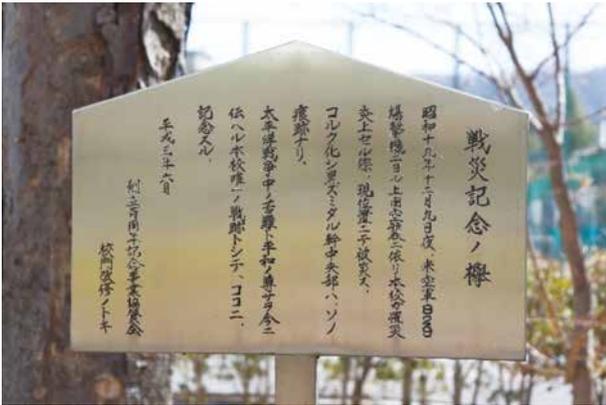


写真2 戦災記念ノ樺の看板



写真3 上田東高等学校外観

たので、飛行場と間違えてしまったのではないかと考えられています。

また、この空襲では、焼夷弾が使われました。焼夷弾とは、中に入っているガソリンなどの燃料を燃やすことによって、対象を火災へと追い込むものです。その焼夷弾の不発弾が、近くの畑に落下していました。

この不発弾を警防団の人たちが回収して調べていたところ、不発弾が突然破裂してしまいました。その破片が、近くにいた子ども3人を直撃してしまいました。そのため、この子どもたちは火傷を負って亡くなってしまいました。

2. 二度目の上田空襲

二度目の空襲は、1945年8月13日午前6時30分ごろにありました。

この空襲は上田・長野飛行場を攻撃する任務をもったアメリカの飛行部隊によるものでした。飛行部隊は茨城県の沖に泊まっていたアメリカ戦艦を離陸し、現上田千曲高校辺り一带にある上田飛行場を爆撃しました。当時の日本軍は特攻隊という、自分の命を犠牲に相手の戦艦や命を取るような作戦を取っていたので、そのような攻撃を防ぐために飛行場を攻撃したのではないかと考えられます。

この空襲では、上田上空に12機の飛行機が襲来し、上田飛行場を機関銃で射撃した後、爆弾をいくつも落としました。この空襲によって、20歳の学生が亡くなり、6名が負傷、飛行機2機と家が4軒、被害に遭いました。

3. 終戦日にもあった上田空襲

最後の空襲は二度目の空襲の2日後である1945年8月15日の終戦日にありました。午前7時～午前8時ごろにアメリカ軍が飛来し、上田市・塩田町（現上田市）・丸子町（現上田市）・長門町長久保古町（現長和町）、望月町（現佐久市）を空襲しました。これは東京、横浜を空襲していた250機の一部が行ったものです。

塩田町（現上田市）では来光寺池に一つの爆弾が落とされました。爆弾の破片が周囲300mくらいまで飛び散り、付近の家に被害がでました。他地域は上田市で工場のみでしたが、長久保古町（現長和町）では住民4名が亡くなりました。

1945年8月15日は終戦日ですので、新聞各社は日本の無条件降伏や天皇陛下の玉音放送を報道していたので、新聞記事にはなっておらず、この空襲は報道されないものとなりました。

この日の空襲の目的もよく分かっていません。一つは工場への攻撃であるため攻撃の意味が分かりますが、他は池や川に爆弾を落としていて、明確な狙いが分かりません。そこで、以前目にしたある記事では、同じ地方都市で軍需工場や飛行場を持っていないにも関わらず、空襲の被害にあった事例がかかれていましたので、ここで紹介したいと思います。

アメリカ軍の資料にはそこを攻撃するはっきりした理由は書かれていませんでしたが、爆撃した搭乗員の証言によると、「正直に言ってその日のことは覚えていない」「地方都市の爆撃は3日に1度の牛乳配達のような日常的なものだった」といったものでした。このことから、終戦日の上田市やその周辺自治体への爆撃は、はっきりした理由のないものだったのではないかと思います。

私はこれらの空襲について、なんて悲惨な出来事なのだろうと感じています。理由のない爆撃ほど人道的とは言えません。もちろん、軍事施設への攻撃も人が亡くなるという観点

から言えば人道的ではないものです。私は戦争関係のことを調べるたびに、人道的とは何だろう、平和とは何なのだろうと考えさせられます。あなたは上田市の空襲について、どのように思われ、どのように感じるでしょうか。一つでも戦争について思うことがあれば、それだけで平和の一步に近づくかもしれません。

<写真1・2・3>写真は、山浦教授撮影。フィールドワークにて。

<参考文献>

- [1] 上田市ホームページ、上田市の「戦争遺跡」(参照日：2022年12月2日)
<https://www.city.ueda.nagano.jp/soshiki/shogaku/3171.html>
- [2] 上田市誌 近現代編(7)、「上田市民のくらしと戦争」、上田市誌編さん委員会、発行：2000年11月1日、(参照日：2022年11月25日、12月2日)

完成されなかった 飛行機部品半地下工場

社会福祉学部3年 高田 一吹

上田地域では太平洋戦争中、飛行機造りを目的とした工場建設が計画されていました。この工場建設計画は「ウ工事」と呼ばれ、昭和20年6月から陸軍によって計画が進められます。工場建設計画のために多くの人々が過酷な労働を強いられました。

この工場ですが、普通とは違う工夫がいくつか施されていました。タイトルにある「地下」というのもその1つ。ここから「工場建設までの経緯」「工事の特徴」「工場建設に関わった人々」という3つのポイントに分けながら、この工場について詳しく見ていきましょう。

最初に工場建設までの経緯を説明したいと思います。詳しい説明に入る前に、まず建設が計画された昭和二十年ごろの日本について少しだけ確認させてください。

このころ、日本が支配していたサイパン島（今のグアム）がアメリカ軍の手に渡るという出来事がありました。ここからアメリカ軍はサイパン島を基地にして盛んに日本本土へ空襲を行います。

当時飛行機を製作していた三菱重工業の工場もこれによって空襲に遭います。爆撃によって破壊された三菱工場は日本軍にとって重要な役割を担っており、急いで再建計画が練られました。

再建にあたって、陸軍には重視したいポイ

ントが1つありました。それは陸軍・海軍のリーダーが集まる大本営の近くが望ましいということでした。

この時期ちょうど長野県松代に新しい大本営が建設されていたため、近くの長野市・松本・上田が候補地となりました。選考の結果、上田地域が選ばれたのですが、これには5つの理由がありました。

①上田地域の工場招致が熱心だったこと。②飛行場が近かったこと③周りに小高い山が多かったこと④上田地域の土は柔らかく、工事がしやすかったこと⑤近くに作物が多く取れる地域があったため、食糧の確保がしやすかったこと。の五つです。

次に工事の特徴について説明したいと思います。「ウ工事」とは“上田地下倉庫工事“のことを短く略した言い方です。「倉庫」と計画名称に入れたのは敵国によるスパイを意識したものでした。飛行機工場を新しく建設すると分かったら敵国に邪魔されるかも知れませんが、村長や住民にも事実を隠して「地下に建物を作るが、それはただの倉庫だから」と説明していました。

この工事に当てられた本当の正式名称は「上田付近三菱重工業株式会社第五製作分散防護工事」といいます。実はこの正式名称に「ウ工事」のポイントが詰まっています。この工場の特徴は“分散”と“防護”の二点にあ

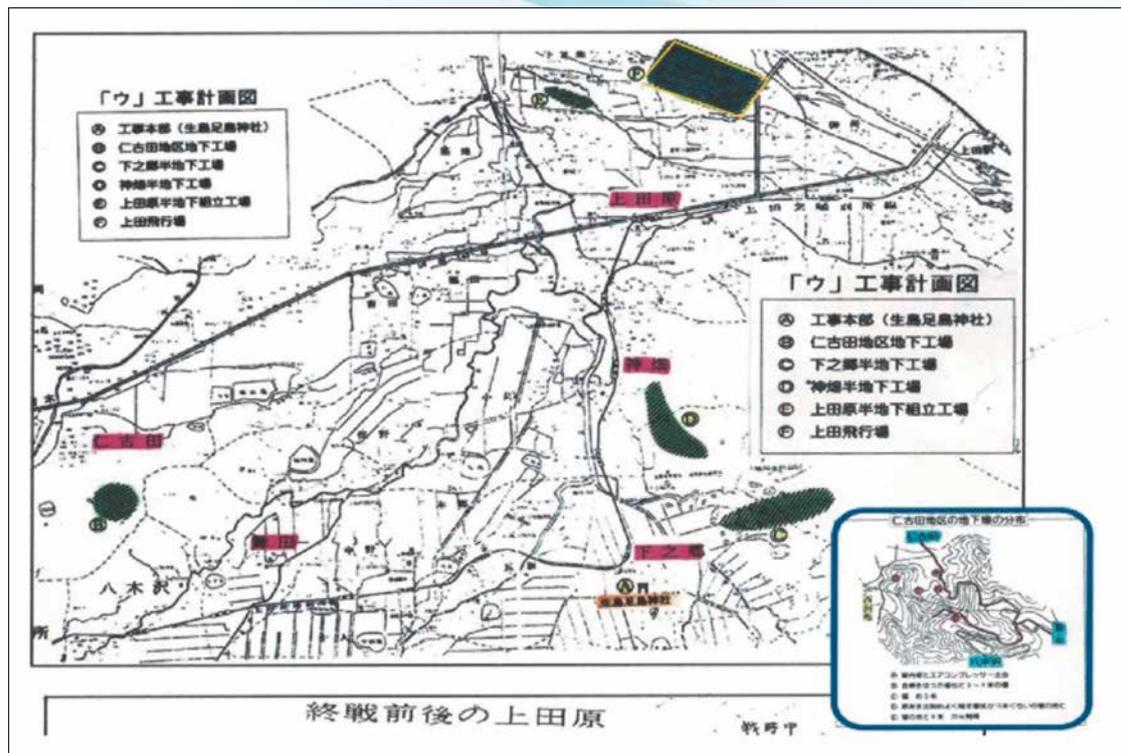


図1 ウ工事計画図 (手塚正道氏作成資料より)

るからです。

分散とはバラバラに分けることです。陸軍は飛行機を1カ所で完成させるのではなく、パーツや行程ごとに工場をわけて飛行機を造ろうとしていました。このために上田市内の3地域に工場の建設が予定されていたのです。工場の場所はいずれも上田市内であり、仁古田でエンジン、塩田でエンジン以外のパーツ、上田原で組み立てを計画していました。

次に防護についてです。この工場は周辺に山々が連なる地下に建設が計画されました。これは空襲から工場を守る目的がありました。先程書いた③小高い山が多かったこと④地質的に土が柔らかく工事がしやすかったこと、に関係があります。陸軍は名古屋での爆撃を受け、空襲を受けにくい地形・場所での建設が重要だと感じ始めていました。山の多い場所は飛行機を飛ばし難いですし、地下にあれば見つけ難いことが考えられます。そ

のためにも③④は重要であり、特に③は地下に作る上で欠かせないポイントでした。

次に工場建設に関わった人々について見ていきます。

この工事には沢山の働き手が関わりました。軍人はもちろん、上田地域の住民や子供達も働かされることになります。工事はとても過酷であり、子供などは地面にへたり込んで休んでいたそうです。

この工事には多くの朝鮮人が関わっていたことが記録に残っています。この工事で大勢働いていたとされる朝鮮人についてここから詳しく見ていきたいと思えます。朝鮮の人たちは下之郷東村に小屋を建てて生活し、朝になると上半身裸で作業所に向かっていました。

この工事に携わった朝鮮人は総勢で約4400人とされています。仁古田1400人、八木沢800人、小森山800人、東山国有林800人、川辺400人です。この中には強制連行

された人たちもいました。彼らは粗末な宿舎に住み、貧しい食事をとって炎天下での長時間労働を陸軍から強いられていたことが伝えられています。

ここまで見てきたとおり、工事は多くの人々を巻き込み急ピッチで進められました。しかし工場は完成されないまま終戦の日を迎えることとなります。今は各地域にそれらしい「跡」が残っているのみです。私たちは建設が計画された現場に赴いて実際に取材を行いました。

仁古田には途中まで掘られた地下壕とそれを塞ぐ格子窓が残っており、付近には地下工場建設を伝える立て看板が設置されていました。看板には地下工場についての説明が記されているのですが、文中にある「朝鮮人」の文字がうっすらと削られているのを目にしました。

私はこの工場建設において最も関心を向けるべきは「人々への強制労働」についてだと思います。特に朝鮮人への強制労働は今に続く大きな問題です。ひとたび戦争を始めると、人間は善意や良心といった人間性を失ってしまうのです。

ある戦争体験者の女性が、「目的のために争いを始めるのは人間に備わった本質」だとお話されていました。人間の本質であればこ



写真 仁古田地下壕
フィールドワークにて、山浦教授撮影。

そ、私達は戦跡や戦争を伝える証言へ積極的に耳を傾け、戦争について考え続けることが求められるのではないかと感じます。

〈参考文献〉

「上田市誌 近代史編(7) 上田市民の暮らしと戦争」
二〇〇五年十一月一日 上田市編さん委員会
「上田飛行場の歴史」 村山孝製作資料 (参照日)
2022/12/16

松の木が語る戦争

社会福祉学部 3年 下島 佳乃

社会福祉学部 3年 工藤 千佳

下の写真は、上田市下之郷しものごうにある東山に生えている松の木です。この松の木をよく見ると、幹に矢羽根のような傷跡がついているのが分かります。皆さんは、なぜ、松の木にこのような傷跡がついているのだと思いますか。



写真は、山浦教授撮影。
フィールドワークにて。



東山周辺の地図
上田市ホームページより引用



東山の遊歩道ゆうほどうを進んでいくと、上田市教育委員会によって設置された「戦争を伝える松」の案内看板が見えてきます。
この看板の奥に、矢羽根のような傷跡がついた松の木は生えています。

実は、矢羽根のような傷跡がついたこの松の木は、今もなお、生きて残っている「戦争遺跡」です。どこにでも生えている松の木がなぜ「戦争遺跡」なのでしょう。

戦争に使う戦闘機^{せんとうき}を動かすためには、燃料のもとになる石油が必要です。しかし、日本では石油はほとんどとれないため、戦前はアメリカから輸入していました。しかし、第二次世界大戦が始まり、アメリカを敵に回してしまった日本は、石油を手に入れることができなくなり、その代わりになるものを自分たちの力で探さなくてはいけなくなってしまったのです。

そこで軍部が注目したのが、松の木から採取できる「松脂^{まつやに}」です。実際に、ドイツでは松脂^{まつやに}を飛行機の燃料として使ったという記録が残っていたため、日本でも石油の代わりに松脂^{まつやに}を戦闘機^{せんとうき}の燃料にしようと考えました。そうして、軍部から全国民に松脂^{まつやに}を集めるよう命令が出されたのです。

軍部から命令を受けた国民は、全国各地で大々的に松脂採取^{まつやにさいしゅ}に取り組み始めました。上田もその一つです。その証拠に、東山がある下之郷^{しものごう}の他にも、丸子、真田、浦野、武石でも同じように矢羽根のような傷跡がついた松の木が見つかっています。

この松脂採取^{まつやにさいしゅ}は大人だけではなく、子どもも手伝わせられました。下之郷^{しものごう}ではたくさんの松脂^{まつやに}を集めるために、約100人の地域住民からなる「松脂採取組合^{まつやにさいしゅくみあい}」をつくって毎日のように採取していたそうです。100人が一人1つ、一斗缶^{いちとかん}と呼ばれる入れ物とのこぎりを持ち、ほぼ毎日のように朝早くから松林に行きます。そして、木の幹の下の方からのこぎりでV字の傷をつけて、その下に一斗缶^{いちとかん}を置いて傷跡から松脂^{まつやに}が出てくるのを待ちます。1日に一斗缶^{いちとかん}がいっぱいになるほど松脂^{まつやに}



松脂採取^{まつやにさいしゅ}で実際に使われていたのこぎり。

独特な刃の形をしています。

のこぎりは「ヤマンバの会」村山隆さん提供

写真撮影：山浦教授

を集めることができたそうです。当時は木を傷つけるのに許可は必要なかったため、人々は松脂^{まつやに}をたくさん集めるために、繰り返し松の木に傷をつけました。そうして、東山の松の木の幹には矢羽根のような傷跡が刻まれていったのです。

松脂採取^{まつやにさいしゅ}が行われた目的は、戦闘機^{せんとうき}の燃料にするためでした。大人、子ども関係なく、お国のために毎日一生懸命集めた松脂^{まつやに}で果たして本当に戦闘機^{せんとうき}は飛んだのでしょうか。混ぜ合わせて使用したという証言もありますが、航空機燃料としては質が悪かったそうです。その代わりに集めた松脂^{まつやに}は、発電機や蒸気機関車に石炭と混ぜて使用されるなど、戦闘機^{せんとうき}の燃料として使われたという記録は見つかっていません。

人間が引き起こした戦争によって傷つけられた松の木。今もなお、傷跡からは松脂^{まつやに}が出続け、何とか傷跡^{ふさ}を塞ごうと周りの木の皮が

盛り上がっています。しかし、一度傷つけられてしまった松の木は、免疫力が下がり枯れやすくなってしまうため、今では数本しか残っていません。

上田市には、そんな松の木を保護したり、松脂採取痕松の存在を全国に知らせる活動を行っている「ヤマンバの会」という自然保護団体があります。ヤマンバの会事務局長の村山隆さんは、「戦争は人も含めた最大の環境破壊である。」とおっしゃっていました。

人々によって傷がつけられなければ、東山にはきっと今も豊かな松林が広がっていたでしょう。人々も戦争なんて起きなければ、松の木を傷つけることもなかったでしょう。戦争はたくさんの命を奪います。戦争が奪う「命」は人だけではなく、自然も含まれているのだと、実際に今もなお、傷跡が生々しく残っている松の木を見てひしひしと感じました。松の木は人間と違って話すことはできません。しかし、「なぜ矢羽根のような傷がつけられているのだろう。」と疑問に感じ、その理由を調べてみれば、松の木が私たちに戦争の愚かさや悲惨さを必死に語りかけていることに気がつくはずです。皆さんも実際に東山を訪れ、松の木を実際に見たり、その傷跡に触れ、声なき声に耳を傾けてみてはどうでしょうか。



写真は、山浦教授撮影。
フィールドワークにて。

遊佐卯之助准尉の自決から 考えさせられたこと

社会福祉学部3年 岡田 輝

1945年8月15日。日本は戦争に負けました。その3日後の8月18日、ある悲惨な出来事が起こりました。

上田市富士山の「猫山」で妻子とともに自決をした人物がいたのです。熊谷陸軍飛行学校上田教育隊助教官・遊佐卯之助准尉（享年30）です。一人で旅立ってしまったのではなく、大事な奥さんと子どもと一緒に自決をしました。子どもはまだ生後27日でした。では、なぜ戦争に負けた3日後に家族三人で自決することになってしまったのか。そして遊佐准尉とはどのような人物だったのかを見ていきます。

遊佐准尉は熊谷陸軍飛行学校が上田市の上田飛行場に設けた上田教育隊で終戦の日まで、他の教官などとともに飛行兵の飛行訓練の指導をしていました。この上田教育隊からは特攻に10数人が送り出されたとされています。当時の日本は軍国主義と呼ばれる時代でした。軍国主義とは、軍隊を中心として、自国の利益だけを追い求めようとする考えや行いです。この考えから、軍隊の中での暴力は当たり前でした。何かできなかつたことがあれば、殴られる。そんな時代の中、遊佐准尉だけは違った考えを持っていたのです。実際に数多くいる教官のほとんどは自分たちの教え子に対し、暴力を振り、教え子たちはそれに耐えていました。しかし、遊佐准尉は決

して教え子たちに暴力をふるうことをしない、温かく優しい人だったと言います。

それでは、なぜそんな優しい人物であった、遊佐准尉が妻子とともに終戦の3日後に自決をしてしまったのでしょうか。

それは、「責任」と「約束」です。

多くの飛行練習生を特攻隊員として戦場に送り出しました。もちろん、特攻隊員として戦場に飛び立つということは、死を意味します。自分たちの命を武器にし、敵に特攻する。こうした中で、遊佐准尉は、教え子たちとある約束をしていたのです。「君たちの命を俺に預けてくれ」「君たちの命が無くなる時は私の命もない。預かった命は自分の命にか



遊佐卯之助准尉（上田飛行場）
写真提供：ヤマンバの会の村山隆さん



上田教育隊の訓練生たち。
後ろは練習機「赤とんぼ」
写真提供：ヤマンバの会の村山隆さん

えて教える」と。教育を共にした教官や自分たちの教え子は飛び立ち、特攻に向かい、結果として遊佐准尉は生き残ります。自分は生き残ってしまった。仲間たちは自らの命を捧げ、特攻したにも関わらず自分だけ生きているわけにはいかない。このような責任感から遊佐准尉は自決を決意したのです。こうして、18日に猫山にて遊佐准尉は軍刀による割腹自殺、妻の秀子さんは短刀で、そして娘の久子さんは両親の手によって、さらに、遊佐准尉は割腹だけでなく、最後には自ら心臓を刺し、一家は亡くなりました。

遊佐准尉と秀子さんは自決の前に多くの遺書と辞世を残していました。これによると遊佐准尉が自決を決意した時には妻の秀子さん（当時22歳）も同じく、決意が固まっていたそうです。一人、長女の久子さんだけを残して二人で行くわけにはいかないということから家族三人で決行することになったのです。

これまで、多くの人々は遊佐准尉の自決に関して、戦争に負けたというショックから、軍国主義者としてその責任を取り自決をした

と考えていました。しかし、実際はそんなことはありません。遊佐准尉は一つの辞世を読んでいた。

「特攻の花と散る日を待ちしかどときの至らで死する悲しさ」

「特攻で散る日を待っていたが、その時が来ないまま死ぬことは悲しいことだ」という意味です。この辞世が読まれたのは8月14日つまり終戦の前日には自決を覚悟していたのです。遊佐准尉は戦争の勝敗に関わらず、教え子との「約束」。そして「責任」を取り自決に踏み切ったのでした。

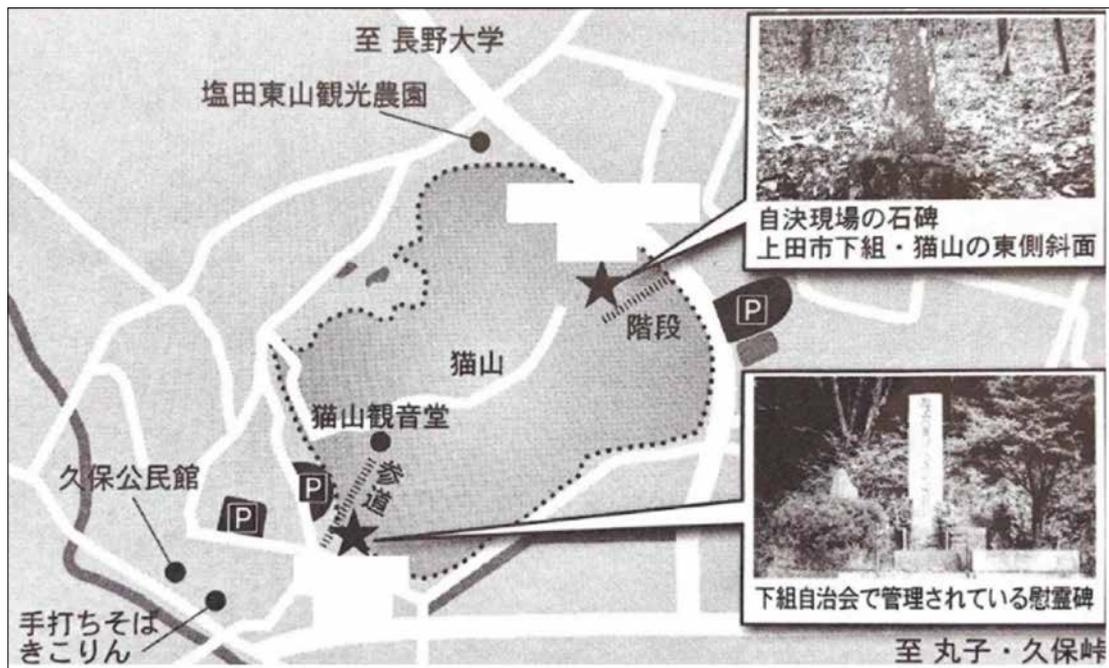
現在では、上田市猫山東側斜面の自決現場には、石碑が立っています。そして、猫山観音堂参道の右側には慰霊碑が立っています。

ここまで、遊佐卯之助准尉とはどのような人物だったのか。なぜ終戦後にも関わらず、妻子ともに自決することを選んだのかについて見てきました。数多くの思いとともに旅立った遊佐准尉の死が忘れられることはあってはなりません。

軍国主義の時代の日本において、当時の男性としては珍しい優しさを持ち、仲間思いの遊佐准尉の命を奪うことになった戦争の歴史は繰り返してはいけないものです。

しかし、今の私たちの生活は戦争を身近に感じず、戦争とははるか昔の出来事と捉えがちです。忘れてしまうことは、同じ過ちを繰り返してしまうことに繋がります。日本にそして上田に戦争があったことを忘れず、このような悲劇を二度と繰り返さないためにも、この話を聞いた私が、この話を読んだあなた自身がこの悲惨な出来事を忘れないでいてほしいと思います。

何度も言います。戦争を繰り返してはいけません。戦争の歴史を残し、語り継いでいくことは今の幸せな世の中を残すためにも、未来



「戦後 70 年遊佐准尉並妻子慰霊の集い」
実行委員会作成より引用

の幸せな世の中を作り上げるためにも必要不可欠なことです。

遊佐卯之助准尉、妻の秀子さん、娘の久子さんの死から学んだ、戦争の恐ろしさ、仲間、家族を思うことの素晴らしさと怖さ、そして優しさ。戦時下を生き抜き、最後には自決をした遊佐卯之助准尉一家の存在を知ることを通して、戦争の恐ろしさを改めて考えてください。現代の私たちにできることを考え、そ

れで終わらせずに、行動に移していくことが大切です。

〈参考文献〉

上田市内アジア太平洋戦跡めぐり資料
2005/05/22 作成・ヤマンバの会（村山）
「戦後 70 年遊佐准尉並妻子慰霊の集い」実行委員会作成資料（参照日）2022/12/16

第3部

調査研究を振り返って

若い世代のこれからの役割

社会福祉学部4年 渡辺 康彦

私は、一年間の活動を通し「ヒト」から戦争体験を聞き、戦争遺跡の「モノ」から当時を考え、再度戦争の悲惨さと命の尊さについて考え直すことができました。上田に住み始め、四年が経ちますが、活動を始めるまで空襲があった事実や戦争遺跡が大学や自分の家のすぐそばにあることを聞いたことすらありませんでした。教科書では学ぶことのなかった、当時の「戦時下の暮らし」について知っていくほど、「戦争」というものが自分のなかで生々しさを持ち、具体的に映っていきました。

今後、日本が戦争を繰り返さないためには若い世代の活動や意識が非常に重要になってくると思います。まずは、若い世代が社会で起こっていることに関心を持つことが大切であると思います。ウクライナ侵攻や世界各国の紛争地域での実態を知ることや日本の社会問題に関心を持ち、世の中で起こっていることに関心を持ち、「知る」ことが大切であると思います。私の同世代や小・中学生の若い世代には、戦争について「知り」、平和について「考える」ことをしていこうというメッセージを伝えていきたいと思います。

この活動をここで終わらせることなく、さらに活動を広げていくことも重要であると感じます。私自身は大学を卒業しますが、来年度以降も「戦争」について学び、考え、伝え続けていきたいと思っています。また、自分の地元の茨城県の戦争遺跡や当時の状況についても調べていきたいと思っています。この活動がさらに大きく広がっていくことを願っています。

この冊子を手にとった人が少しでも、戦争や平和、命の尊さについて関心を持ち、考えるきっかけとなったのならば、私たちの活動が実を結んだと思います。あなたもこの冊子で知ったことを友達や家族に伝えてみてください。

私たちと平和な世の中

社会福祉学部3年 岡田 輝

戦争と現代の私たちの生活は全く関係ないように感じます。実際に、私自身この活動を行う前までは戦争についてまるで興味・関心を抱くことはありませんでした。

しかし、この活動を行う中で、私自身の中にある戦争に対する意識が大きく変わっていきました。戦争とは何か。戦争は人々の暮らしや考えをどのように変えてしまったのか。教科書では決して知ることができない、戦争の真実を自分自身の目で、そして耳で、体で感じ取ることができました。まるで興味・関心のなかった戦争をもっと知りたい。知るべきだという気持ちが強くなっていきました。知った後には、伝えたい。もっと私たちの知る戦争の事実を多くの人たちに広めたいという思いが強くなってきました。私たちの行った活動は決して終わりがありません。戦争の歴史を語り継ぐことは非常に重要なものです。しかしながら、戦争を体験した生の声を聞くことは時が経つにつれ、不可能になっていきます。だからこそ、私たちの活動を通して生の声を知ることが大切だと感じています。こう感じる中で、若い世代である私たちの多くは戦争を遠い昔のように感じていることは事実です。しかし、この遠い昔のことと思える戦争は、今現在も世界のどこかでは起こっています。戦争が忘れられていいのでしょうか。今の平和な世の中があるのは過去の戦争の事実を風化させずに残してきたからです。この平和な世の中を守っていくためにも、今私たちにできることにはなにがあるのでしょうか。誰しものが争いのない平和な世界を望んでいます。戦争の歴史を、記憶を失わないように今、私たちにできることは語り継ぐことです。この本を手にとったあなたたちがもっと多くの人たちに戦争の歴史を語り継いでほしいです。

戦争を知り、伝えていく。この活動は私たちから、この記録集を読んだみなさんへのメッセージであるとともに、このメッセージを皆さんが受け取り、この事実を忘れず、次世代に受け継いでほしいと思います。

今年一年間の活動を振り返って

社会福祉学部3年 工藤 千佳

私は今まで、「自分さえよければそれでいい」という、あまりにも自己中心的な考えを抱いて生きてきました。そのため、ニュースや新聞等を通して世界中で起こっている様々な出来事を目にしても、どこか他人事というか無関心でした。「戦争」に対しても同様です。そんな自分を少しでも変えたくて山浦ゼミに入ることを決めました。

「戦争」については、今まで、小中高と歴史の教科書で学んできました。学んだといっても、教科書に記載されている太字部分をテストで点を取るために、必死に頭にたたき込んで覚えるという、とても表面的な学びにしか過ぎませんでした。そして、私はそれだけで戦争を知った気になってしまっていたのです。

しかし、ゼミ活動を通して、実際に戦争を体験された方々から当時の生々しいエピソードを聴いたり、当時を思い出して涙ぐむ姿や、今もなお市内に残る戦争遺跡を実際に目にして、私の考えは大きく覆されました。もちろん、教科書で歴史上の事実を学ぶことは大切だと思います。しかし、「戦争」とは一体何なのか、その本当の姿を知る上では、その背景にあるたくさんの人の生活や一人ひとりが歩んできた人生、また、その人がどんな考えや思いを抱いて過ごしていたのかを知ることの方が、ずっと大切なのだと気づかされました。

このことから、私がこの記録集を読んでいる全ての人に伝えたいことは、「何事も表面的な事実のみを知っただけで、その全てを理解した気になってはいけない」ということと、「自分の身の周りの人や、起こっている出来事に対して無関心でいることはよくない」ということです。

「今の若い人たちは聞く耳をもたない。だから私の体験を語ることは無駄なことだと思っていた。」この言葉は、私が聴き取りを担当したある方がおっしゃっていた言葉です。私はこの一言と、そうおっしゃって涙ぐまれていたその方の姿が今も忘れられません。戦争を実際に体験していない私たちからしてみれば、戦争は過去のことです。しかし、世界に目を向けてみると、今もなお戦争は起こっています。戦争は過去のことでも、遠い国で起こっていることでもなく、実はとても身近に存在するものです。実際に体験していない私たち若い世代が、教科書の表面的な事実だけで「戦争」を知った気になって満足しているだけでは、日本もまた同じ過ちを繰り返してしまうかもしれません。私たちに当時の体験を語ってくださった方々も口を揃えてそうおっしゃっていました。同じ過ちを二度と繰り返さないために、私たちに求められることは、もっと自分の周りにいる人、周りにあるものに対して関心を持ち、そこから物事の背景を知ろうとする姿勢を持つことなのではないでしょうか。

最後に、私は一年間の活動を通して、「戦争についてもっと知りたい」という気持ちが芽生えました。今回、当時の体験を話してくださった方々の他にも、もっとたくさんの人のいろいろな生活や思いがあるのだと思います。それらをもっと知りたいです。そして、目を背けず向き合い続け、次は私が次世代に語り継いでいきたいです。

理想を現実に

社会福祉学部3年 篠原 隆雅

第二次世界大戦を上田市という地域の単位で、一年という多くの時間を使い、調べたのは初めてのことです。これだけ身近に戦争の怖さ、悲惨さ、その他諸々の感情を抱いたのは私の短い人生において貴重な経験であること。また、語り継ぐ者として主体性を帯びて活動できたことは、ありがたいことだと思いました。

このような活動を通し、私の戦争観というのは大きく変わったことと、変わらないものがあります。大きく変わったことは、語り継ぐ意義というものが理解できたことです。今回の戦争体験者の聴き取りでは、私が想像していた以上の惨劇が戦争時にはありました。聴き取ったお話は教科書には書かれていない衝撃的なもので、それを語り継ぐというのは、平和を望む現代に必要不可欠なことで、若い世代だけではなく、世界中に伝わるようになれば、軍拡が進む現代の問題提起になるのではないかと思います。しかし、変わらないものもあります。それは平和を口にするだけの民衆で良いのかという私の日本人への見方です。みなさんはSEALDs（シールズ）という2015年ごろに話題になった学生団体をご存知でしょうか。安保関連法案や憲法改革に反対し、社会保障の充実や平和的な外交を求めている団体です。そのSEALDsのメンバーの一人は、当時のデモのとき、「そんなに中国が戦争を仕掛けてくるというのであれば、そんなに韓国と外交がうまくいかないのであれば、アジアの玄関口に住む僕が、韓国人や中国人と話して、遊んで、酒を飲み交わし、もっともっと仲良くなってやります。僕自身が抑止力になってやります。抑止力に武力なんて必要ない。絆が抑止力なんだって証明してやります。」といったスピーチをされていました。私は当時中学生でありましたが、本当に大学生がこんなことを言っているのかと驚きを隠せませんでした。このスピーチの内容は理想ではありますが、話を通じない敵に対し現実的ではありません。だからといって、世界の軍拡の風潮がこのまま進むのもよくありません。なので、私は中国人やアメリカ人などの他国の人の考えを知り、理解すること。また、その思考に合わせて、平和とは何なのか、戦争はどのような悲惨なことになるのかを伝えることが現実的なプロセスだと考えます。

上記のスピーチの内容のような理想論でしか、戦争を捉えることができない人間へならないでください。これは若い世代だけではなく、全年齢層に言えることです。どのように理想を現実へできるのか、現実的なプロセスで考える思考と民衆の行動が問われているのではないかと考えます。

今後私は、世界へ戦争の悲惨さを伝える活動をしたいと考えています。日本だけ軍縮をしても平和にはなりません。世界が平和について同じ思考を共有し、行動に移していくことこそが真の平和なのではないかと思います。

一年間の活動を振りかえって

社会福祉学部3年 下島 佳乃

活動を始めるとき、ちょうどウクライナの戦争が連日のニュースで報道される時期でした。しかし、遠く異国の地で行われている戦争は身近なものには感じられず、「戦争はやってはいけないもの」と思いながらも、どこか他人事の出来事と考えていました。

しかし、今年一年のゼミの活動を通して上田市で戦争が起こっていたこと、今では考えられないような教育や生活をしてきたこと、今の自分たちと同じかそれより若い年齢で強制労働させられたり、自由を奪われたりしたことを経験者の方から直接お聞きすることで戦争がどれほどひどいものなのか、と今の自分と重ねることで改めて強く感じました。

また、さまざまな方に戦争体験をお聞きする中で必ず「戦争は絶対に、絶対にやってはいけない」と口をそろえておっしゃっていました。実際に戦争を経験した方からお聞きすることで聞き手である私は改めて、戦争はやってはいけないものと強く感じました。戦争体験者が高齢化となる中、戦争経験を聞く機会が減ってしまうことで戦争はやってはいけないものという意識が薄れていってしまう危険があります。教科書などで勉強したのみでは戦争に対して漠然とした印象しか浮かばず、戦争がどれほど恐ろしいものであるかが完全には伝わりにくいのです。私たちが若い世代に今回の聞き取り活動を広めていくことが平和の継続につながるのではないのでしょうか。

上田市に長年住んでいますが、戦争遺跡があったことや戦時下の様子を知る機会はほとんどありませんでした。今回の活動では聞き取り活動のみならず戦争遺跡を巡るフィールドワークも行ったため、実際に目で見て感じることができました。今後、身近な祖父母に戦争時の話を聞いたり、自分が知らずにいる戦争遺跡を巡ることでより当時の戦争の様子について詳しく調べたいと考えています。また、多くの人に戦争の恐ろしさを伝え、絶対にやってはいけないという認識を持ってもらう機会を提供できたら良いと思います。

今年一年間の活動を振り返って

社会福祉学部3年 高田 一吹

私はこの一年間の活動を経て、戦争を自分事として捉えられるようになりました。授業などで戦争について学んだことはありましたが、あまり真剣に考えた経験は無く、どこか遠い出来事という認識でした。意見を求められても「戦争はいけない」と通念上の言葉をなぞるだけで、そう叫ばれている本当の意味を考えていなかったように思います。もちろん戦争の悲惨さについては理解していましたが、身を切るような切実さで語るテキストや伝え手とは向き合い方に温度差がありました。

しかし、上田地域の戦跡へ赴いたり当時を経験した方のお話を聴いたりして「戦争」が自分の中で具体性を持って行く過程の中で、どのような時代であっても戦争は起こり得るのだと気付きました。同時に、一人一人が戦争について考え続けることこそが平和を求める上で欠かせない行為だと思うようになりました。

聴き取りを行う中で、「現在の日本の雰囲気は戦争に向かう前と似ている」との言葉を聞く場面が何回かありました。戦争の恐ろしさを生身で知る方が減っている今だからこそ、これからの社会をつくる若い世代は戦争の凄惨さや命の尊さについて、もう一度考える必要があると思います。また、徐々に薄れつつある戦争の記憶や各地に残る戦跡を風化させないように伝えていくことも、今を生きる私達にとって大事な役割です。この冊子に目を通してくださった方には、どんな些細なことであっても戦争について抱いた関心があったら大切に育てて頂きたいなと思っています。

かく言う私もまだまだ勉強途中であり、戦争について考え続け、後の世代に伝える役割を担った一人です。地域を通して戦争を学んだ私は、身近な戦争の記録に目を向けつつ、変わり続ける情勢に関心を注いでいきたいと思っています。

今回の調査研究活動で得た物をここで終わらせず、自分の生活に落とし込んでいけたらと考えています。

この冊子が、読んでいただいた方々一人一人に戦争への関心を呼び起こし、身近な「戦争を今に伝えるもの」の存在に気づくきっかけになったら嬉しく思います。

一年間の活動を通して

社会福祉学部3年 宮城 佑妃子

本冊子を手にとっていただき、ありがとうございます。読者の皆様に戦争の悲しさやつらさ、平和の大切さというものがお伝えできれば幸いです。

私は、沖縄県出身です。沖縄県は太平洋戦争において日本で唯一、地上戦が行われた場所となります。住民を巻き込んだ激しい戦闘は、現在でも当時を生き残った人々や沖縄の土地に爪痕を残しています。そのような事情もあって、沖縄県の人々の戦争体験と、長野県の人々の戦争体験には違いがあるのは当然です。しかし、長野県の人々も沖縄のように戦闘に直接巻き込まれることがなかったとしても、食べたいものが食べられなかったり、勉強や遊びなど自分のしたいことができなかつらさ大切な人を戦争で亡くしてしまう悲しさは同じように体験しているのです。このことを本調査研究活動の中で知ることができ、戦争が他人事では済まないものであること、国民全体を巻き込むものであることを実感しました。

太平洋戦争が終わって長い時間が経ちますが、現在でも世界では戦争や紛争が起こっています。自分の身近で起こっていることではないからと無関心になりがちですが、一人一人がこのようにことに関心を持ち、考えていくことが平和を守るために大切なことではないでしょうか。当時、戦争を体験した人々は皆、「もう二度と戦争はしたくない」とおっしゃいます。この言葉の意味を受け止めて、私たちが語り継がれた戦争体験を次の世代につないでいく必要があると思います。

《 編集後記 》

新型コロナウイルスの感染が広がるなか、多くの皆様からご協力やご支援、励ましのお言葉をいただきました。関係したすべての皆様に心より感謝申し上げます。

4、5月は資料を通しての事前学習から始めました。フィールドワークと聴き取り調査は、6月から10月まで併行して実施してきました。ヒアリングの際には、ご自宅に直接伺った方々もたくさんいらっしゃいました。猛暑が続いた8月の暑い時期にも快くご協力をいただきました。また、大学にお越しいただいた方々もおられました。ご高齢のため、ご家族様が付き添ってきていただいた方々もいらっしゃいました。本当にありがとうございました。

ヒアリングが始まりますと、どなたも戦時下の生活をまるで昨日のここのように鮮明に記憶されていらっしゃることに驚きと敬意を感じざるを得ませんでした。当初は、ご高齢でもあることから一時間程度が限度と考えておりましたが、気がつきますと二時間近くお話しいただくことがほとんどでありました。特に印象的だったのは、「若い皆さんが語り継いでいってくれることは素晴らしいことです。ぜひ続けてほしい。」「戦争は、絶対ダメ。繰り返してはいけません。」「話し合うこと。外交が大事です。今の日本は、とても心配です。しっかり勉強してください。」などのお言葉でした。改めて、そのことばの重みをかみしめて参りたいと思います。

今後も「知る」「語り継ぐ」「保存」の3つの視点から活動を継続していきたいと考えております。変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本書の刊行にお力添えをいただきました、上田市教育委員会、塩田まちづくり協議会、信濃毎日新聞社、信州上田学事務局、浦里地区の聴き取りにご尽力いただいた渡辺惣伸様、貴重な資料提供並びにフィールドワークの講師として村山隆様、手塚正道様には多大なるご支援をいただきました。

ここにスタッフ一同心より御礼と感謝を申し上げます。

2022年12月

長野大学社会福祉学部 山浦ゼミ

○渡辺 康彦	社会福祉学部	4年
◎岡田 輝	同	3年
工藤 千佳	同	3年
篠原 隆雅	同	3年
下島 佳乃	同	3年
高田 一吹	同	3年
宮城佑妃子	同	3年

監修 長野大学社会福祉学部 教授 山浦 和彦

記録集作成 | 長野大学地域づくり総合センター「信州上田学」2022年度事業
「若者たちへの伝言」プロジェクト

監 修 | 長野大学社会福祉学部教授 山浦和彦

取 材 | 長野大学山浦ゼミ学生

協 力 | 上田市教育委員会・塩田まちづくり協議会、
信濃毎日新聞社・ヤマンバの会

発 行 | 2023年1月



長野大学 HP 信州上田学サイト



みんなでつくる信州上田デジタルマップ
(信州上田学の情報発信のツール)